
ロード オブ ギャラクシア 少年と恋する少女達

蒼井水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロード オブ ギャラクシア 少年と恋する少女達

【Nコード】

N3338Z

【作者名】

蒼井水晶

【あらすじ】

永遠とも言える果てしなき世界を旅して、降り注ぐ幾億ものきらめき。

その1つ1つに、それぞれの歴史が綴られている事だろう……。

これは、そんなきらめきの1つに記された、英雄達の物語。

少年は旅立つ。

その旅路の中で、仲間を、友を見つけていく。

しかし、その仲間達には美少女が多かった!?

架空の大陸を舞台に繰り広げられる、ドタバタハチャメチャバトル
ラブコメ（ハートフルボッコ）ストーリーが今始まる。

プロローグ（前書き）

蒼井水晶初のオリジナル作品です。

拙い文章ですが、皆様が楽しんで頂けることを祈っています。

プロローグ

ここは、我々が住んでいる世界とは少し違う世界。
その世界の中央には、巨大な大陸があった。

『ギヤラクシア大陸』

それが巨大な大陸の名前である。

その大陸はその巨大さゆえ、果てを知らない。

いや、正確には果てが分からない、と言うべきか。

我々の世界より遙かに進んだ技術を持ってしても。

世界の果てには失われた楽園、伝説にうたわれた楽園、『エデン』
があると言われている。

その見果てぬ夢を目指して、多くの冒険家が旅立った。しかし、誰
一人として帰っては来なかった。

この大陸には、様々な種族が住んでいる。

人間族、ドワーフ族、エルフ族……などだ。

今、この世界で繁栄を誇っているのは人間族。

様々な種族を取り込み、肥大化して来た。

その人間達の主な大国は3つ。

^{エンバイア}帝国、^{エンバイア}ロンバルディア大陸同盟、ドラクシル王国。

この対立する3つの国は、国が成立してから、幾度となく争って来
た。

最大の国力を持つ帝国。^{エンバイア}

最大の軍事力を持つロンバルディア大陸同盟。

最強の兵士と武器を持つドラクシル王国。

その特徴と、地理的条件も合わさって、この争い合う3つの国は決
着がついた事が無い。

現在進行形で戦争中のロンバルディアとドラクシル。

100年前の『ホルスの大逆』以来、不気味な沈黙を続ける帝国…

…。

増え続けるビースト達…。

そして今なお蠢く闇の勢力…。

この混沌とした時代に、光を降ろす者は現れるのか。

それとも、『エデンの伝説』が見つかるのか。

それとも、『狼の日』が訪れるのか。

神話を繰り返す様な予兆。

そして…、世界は揺れ始める。

そこに、1人の青年が旅立つ。

光という信念を心に秘め、新しい旅に出る。

仲間と出会い、友と戦う。

何を信じ、誰と戦うのか、

その運命は、自分で決めなければならない…。

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回にやっと主人公が登場します。

それでは。

第一話 青年（前書き）

今回はバトルになります。
ヒロイン1人目の登場です。

第一話 青年

大陸の中央、やや下。

そこに帝国の首都、エンパイア^{エンパイア}シティがある。

そこには、人間だけでなく、エルフモドワーフも、はたまた、獣人族といった種族まで、種々雑多な民族が暮らしている。

ただ、最近は傭兵崩れの連中や、盗賊などが流入してきているため、治安があまりよろしくない。

そのため、帝国警察はスラム街への見張りを強化しているとかいないとか。

また、テロリストへの対応にも四苦八苦させられている。

まあ、本格的にエンパイア^{エンパイア}シティに攻め込むには、地方都市を突破し、外部城壁を突破し、無数の砲台や機関銃がついた城塞を打ち破り、内部城壁を破壊し、それでやっとこさ郊外へと辿り着く。

しかし、街1つが巨大な砦となっているため、突破するのは容易ではない。

エンパイアシティの中央、北西部。

治安が他の地域と比べると格段に良い。

帝国の観光地の1つである、エヴァン二城があるのもここだ。

エヴァン二城とは、帝国創世記の偉大な將軍、バルドー・エヴァン二伯爵の名を取った2つの城のことだ。

しかし、100年前の『ホルスの大逆』以降、ビーストの巣窟となっているそうだ。

また、北西部には、若者が多い。

ここには、帝国軍術学校があるからだ。

帝国軍術学校、その大正門に青年は居た。

短い黒髪に狼を思わせる鋭い瞳。

細身だが筋肉質の体つき。

身長は170センチ前後だろう。

その瞳ゆえ、雰囲気に近寄りがたい物がある、というわけでもない。全体的に穏やかな雰囲気に包まれた青年だ。

腰にはロングソードと拳銃が揺れている。

彼は、大正門前で何かを思案していた様子だったが、思い切ったように顔を上げると、セントラルストリートをゆっくりと西に向かって歩き始めた。

30分ほどたつただろうか、同級生や先輩と挨拶を交わしながら歩いてきた彼が足を止めた。

そこには、アイテムシヨップがあった。

ただし、強盗団に占拠されていたが。

彼は目を細め、強盗団の全容を仰ぎ見る。人数は5人ほど。

傭兵崩れのように、ボウガンやライフル、騎兵用のスピアをもって
いるようだ。

中央に居たのがひげ面で大柄な男。

周りの連中より一回り大きく、腰に下げていたのは、ロングソード
ではなかった。

グレートソード。それがその剣の名前。

両手で扱う大型の剣。

ロングソードの場合は、片手でも両手でも持てるように柄が工夫さ
れているが、グレートソードは違う。その大きさのため、両手でし
か振るえないのだ。

しかも、力の弱い人でも斬る事は出来るが、振り回すことはできな
い。

それを振り回す事ができるのは力の強い者だけだ。

ちなみに、遺伝的に力が強く、寿命も非常に永い竜人族はこの剣を

好むらしい。

彼は、ショップを包囲している警察の一群へ近づき、声をかけた。

「ここを占拠しているのは？」

「なんだなんだ野次馬か！邪魔だ邪魔だ、どけ！」

「大丈夫。俺は軍術学校の生徒です」

「ん……オホン！これは失礼した。何用かな？」

「ここを占拠しているグループは？とお聞きしました」

青年は響く様なテノール声で聞いた。

それに対し、警察官は、一度咳払いすると、報告書を読み上げた。

「アイテムショップを占拠しているのは、元ロンバルディア軍所属の傭兵達だ。」

今の二国間戦争はロンバルディアが優勢だ。大方、もういらなくなつて首を切られた、つてことだろうな」

「はあ……、はた迷惑な話だ。で、なんで突入してないんです？」

「それが、第一班と第二班は突入したのだが、いいようにあしらわれて沈黙させられた。殺されてさえない。あいつらはどうやらただの飲んだくれではないようだ。戦場をわたつて来た猛者達だろう」

「なるほど……」

「どうするんだい？第三班はたつた今、全員沈黙した。我々は今増援を呼んでいる。機動隊が到着するまであと30分だ」

「俺が行つてみます」

「やめたまえ、君の様な実戦経験も無い若者に勝てる相手ではない」

「案ずるより産むが易しつていうでしょう？問題ありません」

「む……」

遙か東の島の諺を引用しながら言った余裕綽々の笑みを見て、何かを感じ取ったのか、警察官は苦笑を見せ、『行つてこい』と手で示した。

「待ちたまえ！君の名前を聞いていなかった。教えてくれ」

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

その言葉を最後に青年　スタンリー・アークエッジはショップのドアを蹴破った。

「うっ……、酒臭え」

スタンリーは思わず鼻を押さえる。

仕方の無い事だ。そこには、『海賊の酒』と呼ばれる度数80度のドギツイ酒の瓶が転がっていたのだから。

今、傭兵崩れの盗賊団は絶賛酒盛り中だ。

不満そうな見張りの2人を除いて。

スタンリーは息を止め、足下にあつた酒の空き瓶を拾うと、ふつ、と息を1つ吐いて空き瓶を左の男に投げつけた。

「ぐあつつ?!」

見事命中。

「どオした!!」

空き瓶の割れる音を聞いて、大柄な男を除く3人が駆け寄る。

その駆け寄った際に、スタンリーは乱雑に倒された商品の影へ身を隠す。

「また突入してきやがったのか、三度目はねえ!皆殺したア!」

と見張り　空き瓶を投げつけられてない方が大声を出すと同時に、スタンリーは腰の拳銃を抜いた。

『ミリタリー&ポリス：マークA』

それが拳銃の名前。

インベリアルガード
帝国防衛軍や、帝国警察に流通している実弾銃。軍術学校で支給される銃だ。

かなり使い込んであるのだろう、銃全体が黒光りしていた。安全装置を外し、残弾数を確認。

昨日マガジンを変えたばかり。問題は皆無。

一瞬の思考の後、発砲した。

放たれた弾丸は、大声を出した男の右の腕へと命中。

続けて放たれた弾丸は、右足、左足両方の太ももへ命中。

たまらず、膝をついた所で、走って来た勢いを乗せた右ストレートがその顔面へ叩き込まれた。

「目標1、沈黙」

誰に伝えるとなく呟いて、次の男へと向かうスタンリー。

その顔面にスピアが突き出された。が、それを半身になってかわし、左足で踏み込みつつ、銃を握った左拳を眉間に突き当てた。

しかし、弾丸は発射されない。

ただ、男は脳震盪を起こし、気絶した。

「強い……！」

大柄なリーダー格の男が小声で叫び、凶暴な笑みを浮かべたのにスタンリーは気づかなかつた。

ボウガンを持った男が二段回し蹴りを打ち込んでくる　スタンリ

ーは地面と水平になるほど身体を反らせ、それを避けると、その体勢のまま、ジャケットの内側のホルスターからもう一丁銃を取り出し、男の胸に突きつけた。

『GANNER SINGEL HAND .45』

ガンナー・シングル・ハンド・45。それがその拳銃の名前。

45口径の拳銃。

赤子の時のスタンリーが入れられていた箱に入っていた拳銃であり、弾丸を自動で生成するという特殊な機構を持つ。

これを扱えるのはスタンリーしかない。

この機構は現在の技術では再現不可能であるらしい。

「楽になれ」

その台詞と共に、左手に握られたフォーティファイブが吼えた。

その頃……。

外を包囲する警察官達はこの地区の警察署長の訪問をうけていた。

「状況は？」

警察署長が低い声音で問う。

「現在、軍術学校の青年が1人で戦闘中です。強盗団は3人が沈黙、1人が死亡の恐れあり。栄光ある我々帝国警察が1人の青年に鎮圧を任せるとは……、弱くなったものです」

さきほどスタンリーの相手をした老警官が苦々しげな笑みを浮かべながら答えた。

彼は50歳を超えた大ベテランで、この現場の指揮を執っていた。

「ふむ……。そうか……。君がそう言うのならばそうなのだろうな」
警察署長も同じような苦い表情を浮かべた。

そして、後ろに隊員達へ顔を向けた。

「何をしている?!?!」

突然警察署長　フランク・ドーウエーは激昂した。

後ろで茫然自失としていた、警察隊員に向かって。

その憤怒の表情を向けて怒った。

「何をしていると言っている！誇りある我々帝国警察が、たかが5人の強盗団に撃破されたあげく、いくら軍術学校へ通っているとはいえ、まだ希望に満ちあふれた若い一市民を援護もせずたった1人で突入させるとは何事だ！貴様らそんな事ぐらい上官の命令無くてもやらんか！！愚か者どもが！己の仕事と正義を果たせッ！」

一同はぼかん、と間抜け面をさらしていたが　真っ先に正気を取り戻したのは荒事に慣れている機動隊の面々だった。

表情が瞬く間に引き締まり、それまで動けずにいた自分達を恥じるように舌打ちをして、次々と突入を敢行した。

機動隊員が突入を始めたその時、スタンリーと最後に残った男は睨み合っていた。

「ふはは……」

男が凶暴に笑う。

対して、スタンリーは無言で立っていた。

「強いな、少年。これでやっと俺は終われる」

男はどこか寂しげな笑みを浮かべていた。

「……………」

「おいおい、なにか喋ってくれ」

「1つだけ聞く。ミリはどこだ」

スタンリーは足下でうめく盗賊を冷然と見下ろしながら言った。

「ミリ…………？ああ、あのガキか。奥だ。何も危害は加えていない。

これは約束する」

スタンリーは名誉や金が欲しい訳ではなく、ここを経営している家族と顔見知りであっただけである。

彼はここを経営している夫妻の1人娘、彼に懐いている少女が気にかかり、1人で飛び込んで来たのだ。

「店主と奥さんは…………？」

「悪いが…………」

男はそう言っつて隅を顎で示した。

「…………！」

スタンリーは声も無く驚く。

ギリリ。歯茎がきしむほどの力で歯を食いしはる。

胸の奥底から沸き上がる感情は何だ。怒りだ。

ふがない自分への怒り、後悔、憤怒。

俺はこんな俺を許してはいけない。

彼は怒りに身を任せた。

怒りは興奮へ。

恐怖を握りつぶす活力へ。

腰の長剣を抜き放ち、怒りのままにあり余る力で剣の柄を痛いほど握りしめる。

「おおおおおおおっつー！！」

その怒りは抑えきれず、声に表された。

咆哮。

それと共にスタンリーは爆発的に地面を蹴り、駆ける勢いのまま相手の懐に突進した。

「ハアツツ!!」

その突進をニヤリ、と笑いながら見、男は短い気合いと共に青年の頭上に大剣を振り下ろした。

それを転がってかわす青年。

転がって立ち上がったところに二段撃。大振りの薙ぎ払いと、突きのコンビネーション。

薙ぎ払いを身体を沈めてかわした青年は、突きを横に弾いて力のベクトルを横に受け流した。

このガキ、腕が立つ。

一旦、飛び退いて体勢を立て直し、その青光りする剣をこちらへ向けて構えている青年を男は笑みをたたえて見返した。

普通、中途半端に腕が立つと俺の大剣を受け止めようとするが、このガキは受け流した。まともに受けたら剣がへし折れることに気づいたか。

まったく、初めてだぜ。俺の剣をかわすどころか、その特性まで見抜きやがった。

訓練、じゃねえな。こいつあ、『実戦経験』がある。

そこまで思考すると男は青年に声をかけた。

「おいガキ！名前は何だ？」

「あんたに教える必要は、ない！」

勇ましいねえ。

まるでそう言うかのように歪められた口は、男が戦場を駆け巡って来た猛者であることを如実に示していた。

スタンリーは飛び上がりながら斬り上げる。

その華麗な斬撃を、男は口笛を吹きながら避ける。

スタンリーは返す手で、跳躍した状態から急速落下し、剣を男の頭

上に叩き付けた。

ガキンツ、と金属音が響き渡る。

「ハッ、いい動きしてるじゃねえか！」

口元に相変わらず笑みを浮かべながら男は挑発した。

「フン、お楽しみはこれからだ」

とスタンリーも笑いながら挑発を返した。

「行くぜ！」

スタンリーが繰り出したのは多彩な斬撃の連続攻撃。グレートソードが取り回しの良くない武器と一瞬で見抜き、強力な斬撃よりもこちらの方が効果がある、と結論づけた。

長剣の特性を十二分にいかしたコンボ攻撃は次第に男を追いつめていく。

しかし、手首を返す一瞬の隙を突かれ、剣を遠くへと飛ばされてしまった。

「ガキが……。終わりだ」

男は剣を頭上に高々と掲げ、スタンリーを兜割りに一刀両断にしようとしている。

「スタンリーお兄ちゃん！！」

男は驚きの表情をして、奥の部屋に視線を転じる。

「ミリッ！来るな！！！」

走り寄ろうとした少女に向かって叫ぶスタンリー。

「チイツ」

男は舌打ちをして、剣を振り下ろしたが、弾かれた。一体何が起こった？

啞然とする男を目の前には、硝煙が煙っている銃口。

何が起きたか。

それは、スタンリーが一瞬で腰のホルスターから『ミリタリー&ポリス：マークA』を抜き、剣の軌道に合わせて、撃った。

そのことにより、振り下ろされる剣の力のベクトルは逆へと転換され、弾かれたと言う訳だ。

「ゲームセツトだ」

男が聞いたその言葉は、いやにゆっくりと空間に響いた。

ドドドドン！

バックステップと同時にスタンリーは男の四肢へちようど四発の弾丸を撃ち込んだ。

「ぐお……！」

地響きを立てて男が倒れると同時に、少女が飛びついて来た。

「ミリ……！大丈夫だったか！？」

ミリ・ヘクター。

紫の髪を腰まで伸ばした155？ぐらいの小柄な少女。スタンリーよりも2つ年下の15歳。

懐いている、と言うよりは、好意を抱いていると言った方が正しいのだが、スタンリーは自分に対しての好意に全くもって気づかない超弩級の鈍感だ。

彼女からすれば『好き』なので、スキンシップをするのだが、スタンリーからすれば『妙に懐かれている』からスキンシップをされていると思っっている。

この認識の相違は直すのに多大な労力が必要だ。

胸下の辺りに飛びついて来た少女の頭を撫でながら彼は言った。

「うん……、ミリは大丈夫、でも、グスッ、お母さんとお父さんがく……うえええんく……！」

15歳の子供には辛いだろっ。

両親が2人とも殺されたのだから。

その苦しみは言語を絶するものがある。

俺には両親がいない。だから、この苦しみが分からない。けど、デイビットが殺されたら、俺も泣くだろっ。

彼は心の中でそう思っていた。

スタンリーは捨て子である。その彼を男手1つで17歳まで育て上げたのは教会地区のデイビット神父だった。教会前に捨てられていた彼を拾い、育てた。

デイビットにミリのことを頼んでみよう。なんとかかしてくれるかもしれない。

そう考え、後は警察に任せて退散しよう、そう思ってミリの手を引き、階段へ向かったところで、男が跳ね起きた。

最初に瓶を投げつけられ、気絶していた男だ。男は腰の剣を抜き放ってこちらに走ってくる。

「ミリ、伏せてろ」

「うん！」

少女を地面に伏せさせると同時に、懐のフォーティファイブを抜き、身を屈めて敵の横薙ぎをかわすと、その顎へ向けて銃のバレルを突き入れる。

それと同時に、フォーティファイブの銃口が火を噴いた。バン！

一発の銃声と薬莖の転がる音。

男は顎から頭にかけて撃ち抜かれ、即死した。

その動きを見ていた機動隊員が驚愕の表情を浮かべて呟いた。

「GAN≡FIGHT……」

『GAN≡FIGHT』とは、ここ5年ほどで急速に広まった近接戦闘術。

銃の射撃と軍隊格闘を高度に組み合わせた戦闘術。

ゼロ距離での射撃戦や、一対多数の戦いを制するために開発されたと言われている。

機動隊員にとって、今、彼が見せた動きは驚きだった。

機動隊員は、軍術学校の生徒の『GAN≡FIGHT』がこれほどの技術を持っているとは考えていなかったのだ。

しかし、彼の認識は間違いだった。

外では、スタンリーについてのデータが送られて来ていたが、その一点を見て警察署長たちはあんぐりと口を開けた。

『GAN II FIGHT』の創始者と戦い、勝利した　とそこには書いてあった。

「異常、と呼べるほどの闘争センス」

「あの青年は完璧だ。今の帝国軍人ならば万に一つも勝ち目はない」「彼を鍛えた。彼ならば私を超えることが出来るだろう」

そう、創始者の言葉が述べられていた。

「む……、奴らを取り押さえろ！」

フランク・ドゥエーはあんぐりと口を開けていた状態から意識を取り戻すように首を振ると、高らかに命令を下した。

入口から青年と少女が出て来た。

それを見て警官達は万歳を叫び出す。

フランクも口に緩やかな弧を描く。

「良くやってくれた。スタンリー君」

フランクは2人に穏やかに声をかけた。

「いえ、それより、ミリを教会へ連れて行ってよろしいでしょうか？」

そのフランクとは対照的にスタンリーの拳は白くなるまでに握りしめられていた。

「それは構わないが……どうかしたのか？」

「いえ、少々自分が許せないだけです」

「……。今、報告を受けたが、彼女の」

とフランクは青年の横の小柄な少女を見下ろしながら深刻な表情で言った。

「御両親が亡くなったとか。そのことについてだろうか？」

「なぜ……、分かるのです」

「君の表情を見れば分かる。気負わないでくれ。元はといえば我々

の責任だ。……すまなかった」

フランクはミリに向かって深く頭を下げた。

「俺らはもう行きます。署長もお気をつけて」

「うむ、ありがとう」

夕日に照らされて教会へと手をつないで歩く2人をまるで兄妹だ、
と思いつつ、フランクは彼らが教会に消えるまでその背中を見守っ
ていた。

第一話 青年（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は育ての親と、他のヒロインより一歩進んだ位置にいるヒロインを出します。

それでは。

第二話 教会（前書き）

教会を舞台にラブコメ（なんだそりゃ）が始まります。

第二話 教会

いつのまにか夕方。

兄妹のように寄り添う2人は教会地区へと、燃えるような夕日のなか、歩いていった。

「大丈夫か？」

スタンリーは心配と安堵がないまぜになった表情で、ミリへと声をかける。

「ミリはもう大丈夫だよ。お父さんとお母さんがいなくても、お兄ちゃん達がいるから」

彼女は太陽のような笑顔を浮かべた。

なんて強い少女だろうか。

スタンリーはそう思った。

この子の笑顔を曇らせるわけにはいかない。

彼はそう改めて決意した。

「ねえ、お兄ちゃん？ミリはこれからどうすればいいのかな？」

純粹そのものの瞳で聞いてくるミリを見て、スタンリーは思わず目が熱くなった。

なぜか知らないが、とても切なくなった。

凄絶な体験をしてもなお、純粹さを失わなかったその瞳。

まるでこの少女がどこか手の届かないところに行ってしまうのではないか、そのような不安に駆られるほど儚く見えたその瞳。

その力を入れたら、ポキリと折れてしまいそうな線の細い体。

全てが淡い幻想のような、そんな気分させる。

思わずスタンリーは膝をかがめ、ミリを抱きしめていた。

いま、抱きしめなければ彼女は霧の中に消えてしまう　そう、心のどこかで叫んだ自分がいた。

「お兄ちゃん……？」

いぶかしげに見上げて来たミリにその泣きそうな顔を見られたくな

くて、彼はミリの肩に顔をうずめて、震える声で繰り返した。

「ごめん、ミリ、ごめんな……守れなくて、ごめんな……」

ミリは抱きしめられたまま、スタンリーの背中におずおずと手を回した。

「なんでお兄ちゃんが謝るの？お兄ちゃんはミ리를助けてくれたんだよ？」

その彼女の優しさが痛かった。その彼女のぬくもりが切なかった。

「ごめん……今だけでいいから……このままにさせてくれ……」

彼はミ리를抱きしめたまま静かな嗚咽を漏らした。

それに彼女が気づいていたかどうかは分からない。

しばらくたって……。

「ごめん、情けないところ見せちゃったね。行こうか」

彼の口調は明らかにいつもより優しい。

スタンリーと同年代の少女達と喋るときと比べると、柔らかい。

ミリ専用、というか、対年下用と言うか、包み込むような口調であった。

スタンリーはくしゃりとした、困ったような笑みを浮かべてミ리를促した。

「うん！」

ミリは元気よく返事をして、また2人で歩き出す。

50mくらい歩いたところで、スタンリーの体がぐらり、と揺れた。

「む……」

がくつ、と膝を地面につき、荒い息を漏らす。

「お兄ちゃん！？大丈夫！？」

「大丈夫。少し力を使いすぎただけ」

彼はそう言つて、ジャケットの前ポケットから『ポーション』を取り出した。

『ポーション』

この世界で流通している体力回復薬の名称。

自分の最大体力の50%を回復することが出来る。

それを一気に飲み干し、「ふう…」と彼は息を吐いた。

「ゴミ箱はどこかな」と

彼は通りを見回し、歩道に設置されていたゴミ箱にポーションのパックを捨て、歩き出した。

2人は教会に着いた。

スタンリーはドアを叩いて呼びかけた。

「デイビット！帰ったよ！」

1分ほどして、神父服を着て、白いひげを顎に蓄えた老人が出て来た。この老人こそ、スタンリーの育ての親、デイビット神父である。その落ち着いた風貌と言動で、地区の人々から慕われている。

若い頃は凄腕の賞金稼ぎハウンドハンターだったらしい。

「おお、スタンリー。怪我は無いか？」

「どこも。それよりさ……」

「何も言つな。おまえの言いたいことはわかっている」

デイビット神父はその表情を見て、スタンリーの言いたいことがすぐ分かったようだ。

さすが育ての親である。

「ミリ、良く生きてくれた」

そう言つてデイビット神父はミリを抱きしめた。

行動が似た者親子である。

「ミリ、良かったのだが、この教会でスタンリーと共に暮らさないか？」

スタンリーが聞いたかかったのはまさにこのことだ。

ミリを教会に住まわせてもいいか？

スタンリーはそれを聞いたかかったのだ。

「ミリは大賛成！」

ミリは元気に。

「俺は言うまでもねえよ」

スタンリーは、少し恥ずかしいのだろうか、頬を掻きながらそう言った。

「よし、決まりだな」

デイビット神父は緩やかな微笑みの中で2人の決定を見守った。

これから祈りの時間だ。

スタンリーは祈りを終え、新しくミリの部屋になる場所へと向かった。

コンコンツ、と2つノックをしてから入る。

もし、ミリが着替えていたら大変なことになるからだ。

スタンリーには経験がある。

幼なじみと言うべきなのだろうか、彼女は孤児だった自分に差別の視線を向けること無く接してくれた。

彼女のしなやかな裸体を一度見てしまったことがある。

もちろん、悲鳴を上げられた。

「どうぞー」

ミリじゃない？でもどっかで聞いたことのある声。

そう思考しつつ、ドアを開けた。

「スー君？」

「ブフツ、ごほっ、ごほっ、ごほっ」

スタンリーは　小さく吹き出してから、咽せた。

俺をスー君と呼ぶヤツは1人しかいない。

「やっぱり、スタンリーだあ」

フェルム・ヴェンジエンス。俺がつけたアイツの愛称はフィー。

そこにいたのは、栗色の髪を肩まで伸ばし、同色の大きな瞳をくりくりとさせている美少女。17歳。スタンリーと同じ年。

「フィー、どうしてここにいる」

吹き出したその表情をなんとか引き締めながらフェルムに問うスタンリー。

「もー、デイビットさんから聞いてないの！？掃除を手伝って、だよ！」

あんの、馬鹿親父イイイー！！！！

スタンリーは心の中で育ての親を盛大に罵った。

「わりい、聞いてないみたいだ」

「うん、わかったよ」

彼女が、スタンリーに差別の視線を向けずに接してきた初めての人だった。（育ての親のデイビット神父は除く）

そのせいか、それとも彼女の優しい性格のせいか、彼はフェルムに好意ではない、がしかし、明らかに特別な思いを抱いている。

『アイツは俺が守らなきゃいけないヤツなんだ』

彼の脳裏に幼い日の誓いが甦った。

その誓いは今でも変わらないよ。フェルムの親父さん。

去年亡くなった彼女の父親に心のなかでそう呼びかけた。

『アイツは俺が笑顔にしなきゃいけない女の子なんだ！』

デイビット神父にそう言ったことも甦ってきた。

懐かしいな。

彼は急に思い出した幼き日の記憶に対し、そう思った。

いつの間にか、彼の顔には微笑が漂っていた。

「もー、スタンリー、聞いてる！？」

「聞いてるさ」

2人は掃除をしながらたわいもない話で盛り上がった。

俺にはやはり、フェルムが必要だ。

スタンリーはそう、誓いを新たにした。

その頃……。

デイビット神父はというと。

ミリの部屋のドアに、つまりは今2人がいる部屋のドアに耳をびっ

たりと付けていた。
何やってんだあなた？

部屋の中からは彼の息子と、娘のように思っている少女。
2人の楽しそうな笑い声がドア一枚を介して聞こえてくる。
彼らの笑い声を聞いて、デイビット神父も穏やかに微笑んだ。が、
次に呟いた言葉はおよそ聖職者らしくないものだった。

「ここまで、お膳立てしてもくっ付かないか、むう、どうするべきか……」

おい、あなた一体ナニさせるつもりだ。

「しかし、見ててむずがゆくなるな、あの2人は
スタンリーと、フェルム。」

互いが互いをととても大切に思っているせいか、2人の関係は家族のような、友人のような、そして、恋人のような曖昧なもの。

そのため、このドアの向こうに広がっている空間は桃色と言うより、オレンジ色の空間だった。

「むう、いつそ既成事実を作らせてしまうか……？」

おい、あなた本当に聖職者か？

「やっぱり、（諸事情によりこの文章は削除されました）なことをさせるしかないか」

と、難しい顔でぶつぶつ変なことを口走るデイビット神父。

ここが教会じゃなかったらあなたただの変質以下略。

「じゃあ、そろそろお店の時間だからわたしは行く、だよ？鍵は閉めておいてねー」

花が咲いたような笑顔で頼み込まれたスタンリー。

「たくっ……」

スタンリーは呆れたような言葉を吐いたが、彼の顔は優しい笑みに彩られていた。

フェルムの満面の笑みでの『お願い』を彼は断れる訳が無い。

フェルムはメアリーと言うウェイトレスと共に喫茶店を営んでいる。

父親の形見の喫茶店を譲り受けた形で出している。

ゆえに、経営者兼厨房担当兼給仕という、なにげに凄い女の子。

スタンリーはその喫茶店『キャンデイ』でいつも朝食を食べる。

昼はフェルム特製の愛情弁当（ ってオイ）を食べている。

夜は彼女が教会に来て手料理をふるまったり、デイビット神父がつかったり、スタンリー本人が作ったり、たまにだが、ミリが作りに来たり。

ミリはああ見えて料理が上手く、プロ級なのだ。

ミリに『キャンデイ』でお手伝いしてみたら、と進めようと思っ
ているスタンリーだった。

「どうしようか……？」

誰に聞くとも無く呟いた。

「寝るか」

「ってオイ。そこミリのベットじゃないのか？」

「……」

寝てやがる。

では皆さん、ごきげんよう（ おまえ誰だよ）

第二話 教会（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は喫茶店『キャンディ』の話が主になります。
それでは。

第三話 喫茶店（前書き）

今回はスタンリーが少々不憫な目にあっています。

第三話 喫茶店

夜になった。

スタンリーはミリと共に、教会の向かい側、喫茶店『キャンディ』へ向かう。

『キャンディ』の中はいつも、柔らかな雰囲気漂っているのだが、今日は違った。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

見るからに軽そうな男2人が、ウェイトレスの服装 黒いロングスカートに白いブラウス、白いエプロンに同色のヘッドドレス、という格好をしたフェルムの腕を掴み、ナンパしていた。

かなり強い力で掴んでいるのか、彼女の顔が痛みに歪んでいる。

「え、いや、あの仕事があるんで……ちょっと困るかなー？」

「じゃあ、仕事が終わった後でいいから」

「え……いや、っその」

「じゃ、待ってるよ」

アイツが痛がつてんじゃねえか。ブッコロス……！

ミリは壮絶にイヤな予感がして、彼を振り仰いだか、時すでに遅し。

「ミリ、ここで待ってる」

そこにいたのは、ブチ切れすぎてなにかのメーターが振り切れたスタンリー。

怒れば怒るほど熱くなるはずの彼が笑う、これほど怖いことがあるのだろうか。

口元は綺麗な三日月を描いているのに、目は全く笑っていない。

ここに良く来て、フェルムとスタンリーの関係 家族のような、

友人のような、そして恋人のような。

その曖昧な関係を知っている常連客は震え上がった。

「ねえ、お兄さん達……」

「あん！？何だ teme ！」

スタンリーは氷のような笑顔のまま、その肩をガシツ、と掴み、言った。

「ちよつとオモテ出ようか？」

なぜ、表がオモテなのかはだれにもわからない。

「吠えてんじゃねえぞガ……」

バキツ。

チンピラがその言葉を言う前に拳が突き出され、そいつは、鼻から盛大に血を噴き出しながら倒れた。

「 teme になしやが ぶべらちつ 」

またも言葉を言い終わる前に、今度は上段蹴りがもう一方の男に命中した。

スタンリーは2人の首根つこを掴み、ドアを足で蹴り開けて、表に出て行った。

（ただいま、とても凄惨な光景が続いております。しばらくお待ちください）

「これで良しつと」

15分ほど時間が過ぎた後、いつもの状態のスタンリーが戻って来た。

「お、お兄ちゃん、だいじょうぶなの？」

「ん？ああ、問題ないよ」

いつもの穏やかな笑顔で答えるスタンリー。

「スー君、ありがと！」

とフェルムは彼の頬に kiss

おおおっつっ。

と『キャンディ』の常連客はどよめく。

「う……？」

ナニ、じゃなかった、何されたのか自覚していないのか、スタンリー！。

「ちょっと、疲れた。俺寝る」
「いやちょっと待て。」

お前ここに来るまでも寝てたたる！

「じゃあ、向こうで食べる？」

と、フェルムが指をさしたのは、奥のVIPルーム（実際はスタンリー専用）。

「おう。そうする」

「分かった。料理はいつものでいい？」

「俺はね。ミリはなにが食べたい？」

ちなみにいつもの、とはオニオングラタンスープと、ソフトフランスパン。そして、ミートローフ。

スタンリーはオニオングラタンスープが季節を通して大好物なのだ。

「え？ミ、ミリも？」

今まで、スタンリーと話せなくて頬を膨らませていたミリは、いきなり声をかけられ、おどおどわたわたしている。

彼女の微笑ましさに常連客も、2人の少年少女も頬を緩めた。

「ミリは、うーんと、スパゲッティ？カルボナーラ？にする」

「了解だよー。少し待っててね」

フェルムが厨房に消えると同時にスタンリーとミリも奥の部屋へ消えた。

数分待つと、料理が運ばれて来た。

こんがりと焼けたチーズが食欲をそそるオニオングラタンスープ。ふんわりしっとり柔らかかなソフトフランスパン。

どっしりとしたミートローフ。

「うん、おいしそう。いただきます」

黄金色に輝くカルボナーラ。

「いただきますー！」

「召し上がれー！」

スタンリーはゆっくりと食べていく。
ミリをそれに合わせゆっくりと食べる。

フェルム自身も、肉団子スープとピラフを食べる。

「そういえば」

ドアの向こうから3人の少年少女の明るい話し声が聞こえてくる。

その楽しそうな声を聞いて、皆初老に手が届きそうな常連客達は優しく目を細める。

「若いつていいねえ」

どっぷりと太った、しかし優しそうな婦人が言う。

「そうだねえ」

常連客達も、昔を思い返しているのだろうか、少し遠くを見つめていた。

「昔はあんなにちっちゃかったのになあ」

「ほんと、いつの間にか大きくなったわよね」

彼らはスタンリーに差別を向けず、『孤児』ではなく、『皆の子供』として、扱っていた。

その心が届いたのだろうか。

幼い頃のスタンリーのような、デイビット神父とフェルム以外全てを憎悪するような視線は無くなった。

しかし、今でも昔の面影は残っているようで、偏見を持った大人や同年代の少年達が向ける中傷に対してはその視線が復活する。

しかも、その視線は何倍もの鋭さを持って突き刺さってくる。

さながらそれは鋭すぎて触れたら怪我をする氷柱のような、そんな視線だ。

昔のような狂気は今でも彼の中にくすぶっているのではないだろうか。

昔より遥かに濃密さを増して。

それが彼らの心配材料だった。

少し前。この喫茶店に若い帝国軍人が訪れた。

スタンリーの食事の世話しているところだったフェルムを侮辱し、スタンリー本人を侮辱し、あろうことかデイビット神父までも侮辱した。

スタンリー本人への侮辱はともかく、家族の2人を侮辱されてスタンリーが黙っている訳がない。

修羅のような勢いで若い帝国軍人の手足を斬り落とした。

そのときの彼の瞳は明らか狂気に染まっていた。

なぜ常連客達はそう思ったのか。

それは彼の瞳がいつものように黒色ではなかったためだ。

彼の瞳は違う色に変化していた。

彼の瞳は レッドアイ 紅い目だったのだ。

常連客達はデイビット神父に問いただしたが、彼は言葉を濁すだけで、何も教えてはくれなかった。

しかし、今の彼にそんな雰囲気は全く感じられない。守ると決めた少女達と楽しそうに談笑しているだけだ。

常連客達は彼の誓いを知っているが故に、なおさら優しい瞳でかれを見るのだ。

カランカラン、鈴が鳴った。

「やあ、皆か」

入って来たのはデイビット神父。

「やあ、こんばんは！」

「こんばんは、デイビット神父。壮健そうで何よりです」

その言葉に軽く手を挙げて応えるデイビット神父。

彼が教会地区でどれだけ慕われているか分かると言うものだ。

「スタンリー達は？」

デイビット神父はなぜか楽しそうな表情で聞いた。

「奥の部屋よ、デイビットさん」

どっぷりと太った婦人が言った。

「む……、それでは邪魔するわけにはいかんな……」

デイビット神父が悪戯な笑みを浮かべていったその言葉に常連客達は大爆笑した。

彼らはデイビット神父の企みを知っている。

すなわち『フェルムの思いに報いてあげよう作戦』だ。　まあ、

苦情は後で受け付けよう。

その爆笑で誰か新しい客が来たのか、と気づいたフェルムが慌ただしく出てくる。

まるで護衛のように部屋からスタンリーも滑り出して来たが。

「デイビット!?!」

スタンリーは驚いていた。

『教会の用事があるから、帰りは遅くなる』

と言って出て行ったはずのデイビット神父。

まさか夜ご飯のうちに帰ってくるとは予想もしていなかったのだ。

「速いなら速いって連絡してくれればいいのに」

スタンリーは拗ねたような表情をする。

いつも大人っぽいぶん、彼がたまに見せるこうした仕草は、彼をまだ17歳の少年だと示していた。

それに気づいたデイビット神父はますます笑みを深くして喋る。

「ん?何をするつもりだったんだ?フェルムでも連れ込む気だったのか?」

「なっ!?!」

スタンリーは顔を真っ赤にする。

助け舟でも出してもらおうかと、彼が横を向くとフェルムが「はうう……」と言つて真っ赤になっていた。あ、湯気まで出ていた。

「そ、そ、そんなわけないだろっ!」

なんとかして絞り出した言葉はめちゃくちゃにどもっていた。

「じゃあ何だ?ミリを抱き枕にするつもりだったのか?」

そう、彼がミリのベットで仮眠をとっていた時、その真横にミリが入ってきて一緒に寝ていたのだ。

小さいくせして、なかなか大胆なことをする少女である。

デイビット神父は、彼はその時寝ぼけていた、という大事なところは言わなかった。(そこが一番大事だろっ！)

ちなみにミリはスタンリーより早く起きて、腕の拘束からなんとか脱出していた。

「……………、あー！もう！」
スタンリーは頭を抱えた。

この馬鹿親父イイイ！！

ついでに心の中で罵っておいた。

「ふふ、冗談だ」

デイビット神父のその言葉を聞いて、からかわれたと気づいて凍結したスタンリーが解凍されたのは5分後である。

解凍方法はミリのチョップ、その名も『ミリチョーラーップ』だった。

「私には、モーゴレムのカツレツのAセットを頼む」

デイビット神父は凍結させた自分の息子を尻目にゆうゆうと注文していた。自分の息子の名前で。

何とずる賢い聖職者なのだろうか。

「わかりました、だよ。少しお待ちください」

ちなみにモーゴレムとはビーストの一種で、かなりおとなしい性格。その肉と乳は美味なため、家畜で飼われたりしている。

一言で言うなら乳牛と肉牛を足して二で割った感じのビースト。

捕獲も簡単で、こちらが攻撃を仕掛けなければ攻撃をしてこないというほど、凶暴が代名詞なビーストではおとなしい種。

「いただきます」

デイビット神父は優雅な動作でカツレツを食べ始めた。

その間にスタンリーと美少女2人は奥の部屋へと戻っている。

スタンリーはこれから寝るのだが、フェルムと一緒にいるとちよっ

としたイベントが起きる。

彼らの関係性と、フェルムの服装。

すなわち、膝枕だ。

フェルムはスタンリーを膝枕すると、状況にもよるが、必ずと言って
もいいほど歌を歌う。

それは、この大陸では有名な子守唄だった。

第三話 喫茶店（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は『子守唄』についての話です。
それでは。

第四話 勇者への子守唄（ララバイ）（前書き）

今回は伏線の登場を何ヶ所か暗示しています。
それを探してみてください。

第四話 勇者への子守唄（ララバイ）

場所は奥のVIPルーム。

ここでは、スタンリーがフェルムに膝枕されていた。

ちなみに、ミリは常連客に呼び出され話し相手をしている。

「悪い、しばらく寝かしてくれ」

スタンリーは、その言葉を最後に轟沈。

その寝顔を優しい笑顔で見つめ、髪を梳いた後、フェルムは透き通るような声で唄い始めた。

『私の勇者よ、空を見上げよ、星々は唄うよ、眠れ眠れ、静かに』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて』

『私の勇者よ、闇の中を照らせよ、そこには、幾千の時の声』

『その歌は、光の中に、眠れ眠れ、と響く』

『永久とこしえの中で、宿命を忘れて』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて』

『私の勇者よ、必ず私に、ただいま、と』

その美しい歌声は常連客達にも聞こえていた。

『勇者への子守唄ララバイ……』

誰か1人がそう呟いた。

『私も良く唄ったものだ……』

デイビット神父が懐かしむように天井を見上げる。

『え？デイビットさんがですか？』

太った婦人が驚いたように聞く。

『うむ。スタンリーが小さい頃にな、寝れない時にはいつも唄ってやっていたんだ』

『彷徨い果てて、私の横に倒れ込む』

『そんな君が、愛しくて』

『崖つぶちでもいい、君を愛してる』
『君のために、祈り捧ぐよ、君を愛してる』
『星々の導きで、出会えたのだから』
『君の帰る場所はここだから』
『ずっと、ずっと、待っているよ』

「あれ？2番になると『私の勇者』から、『君』に変わってる？」
常連客の1人が不思議そうな顔で呟いた。
それに答えるように、デイビット神父が語った。

「この子守唄の起源はとても古い。大陸神話に出てくる勇者の物語の頃からだ。大陸神話が成立したのが約1000年前と言われてい
る」

「へえ」

「大陸神話では、寝ている勇者をシスターが膝枕して唄ったのが最初と言われている。その後、2人は愛し合うようになった、と伝えられている。2番の歌詞は魔王を討伐しにいく勇者が、疲れきって
しかし、シスターの祈りでまた立ち上がり、それを見送るシスター
を表しているのだ」

「なるほど」

常連客は皆、感心したように頷く。

1人が奥の部屋を覗いた。

そこでは、フェルムが唄いながら、スタンリーの頭を撫でていた。
彼女は微笑み、そっとドアを閉めた。

「気持ち良さそうに寝てますよ、スタンリー君。まるで子供みたい
に」

「まだあの子は子供だろうに」
デイビット神父は訝しげに言う。

「違いますよ。まるで、小さい子供みたいな寝顔なんです」

「あの子にとっては、フェルムの膝が一番の枕だからな……」
呆れたような、優しいような、判別のできない微妙な表情を浮かべるデイビット神父。

「そうですねえ。もう、いいかげん、付き合っちゃえばいいのに」

太った婦人がそう言うと、その場にいた全員が「うんうん」と言わんばかりに頷いた。

ちなみにミリはというと、一瞬にして2人を覆った、オレンジ色の空気に取り残され、ふてくされていた。

2人の出す空気は、バカツプルのようなピンク色の空気ではなく、名をつけるならば、サワヤカツプルと言うべきだろうか。

この地区に子供は少ない。まあ、若い夫婦もいるし、教会内に孤児院もあるのだが、大体が初老をすぎた男女や、退役軍人だ。

もともと、退役軍人はスタンリーを嫌って出て行ってしまったが。

その空き家には、『キャンディ』の常連客達の知り合いが次々と引っ越してくる。

その知り合い達は、別にスタンリーを嫌うような人間達ではない。

むしろ、スタンリーとフェルムを微笑ましく見守るような、そんなあたたかな人達だ。

この地区は帝国の首都の地区というよりは、教会を中心にした1つの国と言うべきだろう。

また、スタンリー本人も、フェルムや教会の子供達を守るために、この地区唯一の賞金稼ぎバウンティハンターとして、活躍していた。

凶暴なビーストには、一体につき　ゴールドと、賞金がかけられる。

この世界の通貨はゴールドと呼ばれている。記号はGだ。

そして、種類のビーストを一定数討伐すると、『ハンターポイント』というものが与えられ、『ランキング』が上昇する。

この『ランキング』は、今までに稼いだ『ハンターポイント』の総数で決められる。

スタンリーの場合は、稼いだ賞金額はまあそこそ高いが、『ハンターポイント』は今2500ポイントぐらいしかたまっていない。なぜかと言うと、スタンリーに入ってくる討伐依頼は、同じビーストを駆逐することが多いからだ。

しかも、ビーストとしての強さは最低ランクの依頼ばかりである。例えば、逃げ出してしまったモーグリムの排除、同じく家畜のポークリーム　大きな豚のようなビーストの暴走を止める、野生化したコケツクー、つまり鶏を巨大化させてダチヨウと2で割ったようなビーストの討伐。

ちなみに、モーグリムは牛、ポークリームは豚、コケツクーは鶏と表記する。

たまに出現する凶暴なビースト　リーフライ、ビーストタートル、ポーンビーストなどとランクの最低クラス　を始末するぐらい。それでは『ランキング』が上昇しないのもしかたないだろう。

フェルム達とこの地区を守るだけがいい。

このときの彼はそう思っていた。

しかし、運命は彼を放っておかなかった。

その呼び声はすぐ側に迫っていた。

1週間後、スタンリー達軍術学校の4年生達は、一度軍属を離れ、実戦経験と言う名の旅へと放り込まれる。

この旅で命を落とす者もいる。

ちなみに、その旅路で仲間になった者は、帝国に居住権が与えられると言っらしい。

しかし、彼はまだ知らなかった。

この旅から、彼自身の秘密が明かされていくことを。
彼はまだ知らなかった。

自分がどんな運命を背負っているのかも。
彼の始まりが告げられる旅まで後一週間。

運命を告げる鐘の音は彼に着実に近づいて来ていた

。

第四話 勇者への子守唄（ララバイ）（後書き）

いかがだったたでしょうか？

次回はたびたび物語中にでてきている、『帝国軍術学校』での「マ」マです。

それでは。

第五話 過去？（前書き）

予定していた軍術学校の話まで進みませんでした。
目測を誤りました。

ごめんなさい。

今回はスタンリーの過去が1つ明かされます。

彼は一体どんな宿命を背負っているのでしょうか。

第五話 過去？

小鳥のさえずりが聞こえる。

少し開けられたカーテンから日の光が差し込む。

スタンリーの顔を日光が直撃し、彼は顔をしかめながら伸びをする。

「ううん」

横で誰かが寝返りを打った。

スタンリーは起こさないように慎重に掛け布団を少しだけ剥ぎ、その誰かを確認する。

その『誰か』は、フェルムだった。

しかも、寝間着はワイシャツ一枚というラフな格好。

ボタンの上の3つが止められていないため、彼女の肌があらわになりそうになる。

スタンリーは自然とその胸元に視線が行ってしまう。

「っっ……」

自分の思考に気づいた彼は小さく舌打ちすると、自らの本能の叫びを押さえつけ、布を引き裂くがごとく視線を引き剥がし、体を軋ませながら、フェルムに背中を向けて息を整え、壁にかけてあったロングソードを手に取ると、教会の庭へと出て行った。

そう言う状況にあっても、手を出さない男のことを紳士と言い、一方ではヘタレと言う。

教会内の庭の立木。

それには無数の傷がついている。

猫が爪研ぎをした訳でも、鹿が角を打ち当てたわけでもない。

そこにあつたのは無数の刀傷。

この教会で剣を使うのはスタンリーのみ。

この立木はスタンリーの訓練の相手だった。

およそ10年前、この地区には1人の退役軍人がよく来ていた。彼はデイビット神父とは旧知の間柄らしく、名前で呼ぶほどに親しい友人だった。

まあ、デイビット神父のほうか、彼より一回り年上なのだが。彼は、退役軍人には珍しく、幼いスタンリーをかわいがった。

何時の日かは定かではない。

幼いスタンリーが木の枝で遊んでいるのを見、彼は驚きの表情を浮かべた。

彼は、横にいて、スタンリーを見守っているデイビット神父に訴えた。

「孤児は全部預けた。お前はそう言ったろう、デイビット！」

彼の怒りの声に対し、デイビット神父は緩く首を横に振った。

「あの子は、孤児ではないのだ」

「何だと……！？どういう意味だ」

「詳しくは言えん。だが、あの男の友人のお前なら察することができるともしれんな……」

「まさか、あの少年は……、『あの男』の息子なのか？」

「……………」

沈黙したデイビット神父に対し、彼はスタンリーを観察した。

スタンリーが拙い回転斬りを見せた時に一瞬見えた紅い瞳に彼の眼は釘付けになった。

「彼の眼の色は、赤い。どういうことだ？」

誰に問うとも無く独り言を言って、彼はしばらく考え込んでいたが、何かに合点したのか、「まさか……」の一言の後、顔を蒼白にして、デイビット神父に問いかけた。

「まさかあの少年は、『アレ』なのか……！？」

それに対してデイビット神父は厳しい表情で頷き、続けた。

「あの子の戦闘センス、いや闘争本能というべきか……、違うな……
… 闘争センスと言うべきだな……は異常だ」

後に『ガンIIファイト』の創始者にも見抜られることになる、異常^{イマール}。それをすでに、デイビット神父は見抜いていた。

「なぜ分かる……？」

「この前、暴走したコケツクを、たまたま持っていた木の枝一本で殺したのだ」

「なっ?!?!?!」

彼はあまりの驚愕に眼と口を見開いた。わずか7歳の少年が暴走したビーストを武器も無しに殺した。それは、異常な闘争センスを持つてさえ、有り余るほどに奇怪なことだ。

「どうやって殺した？」

「木の枝の尖った部分をコケツクの眼から脳へと貫き通した。それだけだ」

「……」

彼は無言で考え込んでいた。

この事はもはや、異常ではない。一人いれば戦場の劣勢を覆すレベルのものだ。圧倒性^{ノックアウト}。そこまで彼の思考は辿り着いた。

この時、彼は自分もその、圧倒性を持つていることを皮肉にも忘れていたが。

「ぬっ……」

彼は唸り、空を睨んで考え事をしていたが、スタンリーが遊んでいる庭へと出て行った。

「スタンリー。剣に興味があるのか？」

木の枝を振り回すのに夢中になっていたスタンリーは急に声をかけられ、びくつ、と震えた。

スタンリーが恐る恐る顔を上げると、そこには雲をつくような大男が。

まあ、小さい頃の話だ。

実際には、その男は帝国軍人の平均身長+10?ぐらいの身長だったのだが。

スタンリーは知らない男　しかも退役軍人の服装をしていたを見ると、その目に凄まじい憎悪が灯った。

そのどす黒い眼の色は、歴戦の勇士であったその男さえも一歩後ずさるしかなかったものであった。

まるでこの世のすべてを憎悪するような視線。

彼はその視線に耐えながら、口を開いた。

「まあ、そう警戒するな。俺はデイビット神父の知り合いだ」

その口からデイビット神父の名前が出ると、幼いスタンリーは少し警戒の色を緩めたようだったが、まだこちらに近づこうともしなかった。

幼い子供にはあるはずのない、過剰な警戒心。

それをもたらしただ者は何なのか、と考えつつも、スタンリーが近づこうとしないので、こちらから近寄り、頭を撫でようと手を伸ばした　そこでスタンリーの体はギュツ、と硬直した。

口は一文字に結ばれ、まるで痛みに耐えているような表情。

その表情に彼は絶句すると、少し離れ、スタンリーの体を見回した。よく見ると、スタンリーの体には薄い牡丹の花のようなものがいくつもあつた。

殴られた痣……か。

帝国には、『孤児は災いの元』として嫌う、彼にとっては忌むべき習慣がある。

生まれて来た子供に罪は無い。

彼はそう思っていた。

故に、この地区に来た時、孤児院を開設したのだ。

彼はもう一度スタンリーに近づき、頭を撫でた。

スタンリーはきょとんとして、彼を見上げた。

「俺は、スタンリーの味方だぞ？」

笑みを浮かべながらそう言っていると、やっとスタンリーは無邪気

な笑みを返した。

彼は立木にスタンリーを向かわせ、後ろから手を添えてやりながら、剣を指導した。

指導しながら、彼は見守っているデイビット神父に、親指を立てた。デイビット神父は苦笑し、親指を立てると、教会の礼拝堂へと、戻っていった。

幼いスタンリーと彼の稽古は日が落ちるまで続いた。

その日の夜。

デイビット神父の部屋で、男2人は話し込んでいた。

「驚いたぞ、カルシウス。君があんなことをするなんてな」
「必要な気がした……、それだけだ」

その言葉を最後に、男2人は黙って酒を酌み交わし続けた。

カルシウスと呼ばれた男、この男がもし、教会から出て、セントラルストリートを歩いていたのなら、通行人はどよめき、窓から男達が顔を出すだろう。

この男は、『騎士団総団長』カルシウス・シグマー。後に、『戦士王』と呼ばれる男だ。帝国軍のすべてを統括する男でもある。ようは、帝国軍の最高司令官だ。

彼を凌ぐ命令権を持つものは、この国の長、すなわち、皇帝その人しかないのだ。

彼は、別に退役軍人でもなんでもない。

今もって現役だ。

お忍びでここに来て、開設した孤児院の子供達の笑顔を見るのが、楽しみだからだ。

そこに、弟子の指導も加わった。

彼の口はいつの間にか、笑みを形作っていた。

ちなみに、現在、カルシウスに剣の腕で勝てるものは帝国内ではない。引き分けるのは1人。今カルシウスの目の前にいる男。

すなわち、デイビット神父だ。若い頃の凄腕の賞金稼ぎの剣の腕は今もって衰えていない。

勝てそうなのは、『伝説』と謳われ、『ランキング』でトップに立つ、2人の男の『共通の友人』。

そして今、逸材が1人見つかった。

彼を超えていく若い力を1つ見つけた。

その結論に同時に至った2人は、不意に大笑いした。

カルシウスは、1週間に1回、稽古に来るようになった。

めきめきと腕を伸ばして来る幼いスタンリーを2人は笑みをたたえて見守っていた。

第五話 過去？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回こそは軍術学校の話にしたいと思っています。（予定）
それでは。

第六話 戦女神（ブリュンヒルデ）（前書き）

かなり長くなりました。

3人目のヒロイン登場です。

しかし、主人公と共に旅はしません。

第六話 戦女神（ブリュンヒルデ）

立木に斬り込んでいく。

上段からの斬り下ろし。

袈裟斬り。

払い斬り。

斬撃から刺突へ、刺突から斬撃へ。

教えられた動きに自分で考えた動きを組み合わせながら立木に向かって剣を振るう。

右からの踏み込み。

左からの踏み込み。

バックステップから素早く踏み込み、大振りの一撃。

胸元に剣を構え、剣先を立木に向ける。

突進片手突き。

敵に高速で突進し、放つ強力な突き。

スタンリーの得意技の1つだ。スタンリーはその突進力を利用した高速移動で無数の突きを放ったあと、フィニッシュで強力な突きを打ち込んだ。立木が挟れる。

スタンリーはジャンプし、素早い3連斬り。

その後、空中に跳躍した状態のまま、縦回転斬り×3。

その反動で少し空中に浮き上がると、スタンリーは空中から地面に急速に落下し、剣を叩き付けた。

この1日前、強盗団のリーダーと戦ったときは両手で叩き付けたが、今やった技は片手である。

スタンリーは立木から距離を取ると、腰を沈めた。

その直後、轟音と共に立木が揺れた。

突進片手斬り払い。

これもスタンリーの得意技の1つだ。

強烈な突進から繰り出す斬り払い攻撃。

高速の突進から繰り出す強力な突き。

そしてそこから派生する無数の連続突き。

そのどれもが大陸剣術には存在していないものである。

スタンリー本人が、剣の師匠であるシグマーに勝つために編み出した剣の技だ。

もちろん、動きの基礎はシグマーから習ったものだが、スタンリーの剣術はシグマーのそれとは全く持って似ていなかった。

『剣の動きというのはその人々の性格や個性が反映される、故に基礎は同じでも、1人1人の剣は全く違うのだ』

これがシグマーの持論であった。

スタンリーの場合は、左右からのステップ（踏み込みとも言つ）から繰り出される連続攻撃コンボを出していたかと思えば、

敵を空中に打ち上げる強力な斬撃を放ち、空中で剣を振り回したかと思つたとたん、地面に剣を叩き付けるなど、変幻自在に技を繰り出す。

少し距離が開いていると、強力無比な突進技が襲ってくる、など剣を使うからと言って油断できる相手ではない。

さらには、『GANFIIGHT』も創始者を超える強さで習得している。

しかも、彼には自分の中で一番強い、と自負している斬撃がある。

地面と水平にした剣を腰へ持って来て、剣先は己が背へと導く。腰をすこしだけひねる。

右手一本で柄を持ち、左手は鐔へ軽く添える。

俗にいう居合の構えだ。

東方の島国から伝わった一撃必殺の斬撃。

しかし、東方の島国の剣は反りがあるのに対して、大陸の剣には反りがない。

本場のように、鞘から抜き打ちにバツサリ、というわけにはいかない。

だから、自らの体を鞘に見立て、精魂を込めて一撃。

立木はひとときわ高く音を響かせて、近くにいた鳥がそれに驚いて飛び立った。

スタンリーは持つて来ていたタオルで汗を拭う。
もう季節は七月だ。

この庭に来たときのよような早朝はまだ涼しいが、訓練を続け、太陽が昇ってくると、教会内の庭はムンとした熱気に包まれる。

体を鍛えるのは気持ちがいいが、この暑さはどうにかならないのか。そう思考しつつ、シャワールームへ足を向けた。

途中、礼拝に来た老婆に声をかけられた。

「こんな暑いのに稽古かい。精が出るねえ」

スタンリーは会釈しながら差し障りの無いように答える。

「はい。ありがとうございます」

スタンリーと老婆はすれ違ったが、去るスタンリーの背中へおばあさんの声が追ってくる。

「水分補給をちゃんとするんだよ」

スタンリーは振り返らず、「はい」と答えて、小走りでシャワールームへと急ぐ。

スタンリーはまた、老爺とすれ違い、如才なく会釈をするが、老爺はスタンリーを存在しない、と言わんばかりに無視をした。

彼は目の前の老爺を殴り飛ばしたい衝動に駆られるが、それをなんとか堪えて、さらに速度を上げる。

スタンリーは熱いシャワーで汗を流してから、男物の香水をつけ、下着を着て自分の部屋へと戻った。

彼は黒いバトルスーツの上下に身を包み、その上からジャケットを着る。

なぜこのクソ暑い夏にジャケットを着ているのかと言うと、そのジ

ジャケットは彼のトレードマークだからだ。

ジャケットの背中には、狼の横顔が縫い込んである。

デイビット神父曰く、赤子のスタンリーを狼が見つけたとかなんとか。

そのため、彼のトレードマークとして、狼が選ばれたのだ。

彼は教会の祈りを終えてから、喫茶店『キャンディ』へ向かった。

「おはよう、スー君」

フェルムが満面の笑みでスタンリーに声をかける。

「おはよう、フィー」

スタンリーも穏やかな表情で声を返す。

相変わらず2人の世界を作るのが速い。

それを見ていた常連客達は猛烈な背中のかゆみに襲われた。

『早くあの2人がくっ付けばいいのに』

あまりの2人のむずがゆさに背中のかゆみが出て来たのだ。

「おはよー。お兄ちゃん」

少し眠そうな顔で厨房から出て来たのはミリ・ヘクター。

彼女に対し、スタンリーは驚いた表情で言った。

「なんでミリがここに？」

「ミリはお姉ちゃんの喫茶店を手伝うことにしたの」

とミリは言っただけでまた厨房に引込んだ。

スタンリーは疑問符を頭に浮かべたままだったが、どうにか自分を納得させる。

「おはようございます。スタンリー」

「どわあ!？」

スタンリーは後ろから声をかけられ、飛び上がった。

「ふふ、私です」

そこには、豪奢な金八、じゃなかった豪奢な金髪の髪をロングにした女性が悪戯な笑みを浮かべて立っていた。

「メアリーさんか！あー、驚いた」

スタンリーは顔見知りだと分かると、一気に体の力を抜いた。

彼女はここで働いているウェイトレスなのだ。歳は19歳。ちなみにフラグは立っていない。

幼い頃に植えつけた警戒心はなかなか通常には戻せないものだ。

「メアリー、なにやってるの！？手伝つて、だよ」

「ごめんなさい、呼ばれているみたいです。あなたのお姫様に」

「だ、誰がお姫様だっ！あいつは、別に…その、ああ、もう！」

スタンリーは顔を真っ赤にして反論しようとするが、結局音に乗せられて言葉となることは無かった。

その自分に焦れて頭を抱えるスタンリー。

それを悪戯な笑みで見るメアリー。

戦闘では強くても、女性には優しい紳士な性格が災いしたのか、スタンリーはメアリーには頭が上がらないのだ。

しかし、スタンリーはフェルムや軍術学校の女性達のことについて相談するのはデイビット神父ではなく、このメアリー女史なのだ。

いつもはスタンリーをからかったり、そのスタイルの良い体でスタンリーを真っ赤にさせたりと、悪戯を繰り返す彼女だが、真面目な場面では頼りになる。

まさに、近所の頼れるお姉さんのような感じの女性だ。

それに対して、スタンリーは振り回される弟という感じだろうか。

フェルムとスタンリーとは違うが、微笑ましさを感じさせる関係だ。

「メアリー、早く来てよー」

フェルムの声がまた聞こえる。

「ちょっと待っててー。今注文取るからー」

「はい」

しばし奥に向かって話した後、メアリーはスタンリーに向き直った。

「ご注文は、ヒーローさん？」

もちろん、悪戯な笑みを浮かべたままで。

「あんたは普通に人の名前を呼べないのか！？」

スタンリーは突進して来る猪もかくやという勢いでツッコミを入れた。

「えー、だって、スタンリーはフェルムがピンチのときは必ずと言っているほど出現するじゃん」

「そうですか？」

「自覚してないのかしら……?」

メアリーは額に手を当て、ゆるゆると首を横に振った。

「まあ、いいわ。ご注文は？」

「マフィンのAセットで」

「はい、注文はいりまーす、マフィンのAセットです」

メアリーは厨房に向かって叫ぶと他の常連客の元へ注文を取りにいった。

数分後、朝食が運ばれて来た。

焼きたてで湯気を上げているマフィン。

カリカリに焼かれたベーコンと半熟卵。

コーンの冷製スープ。

以上がAセット。

「いただきます」

「召し上がれ、だよ」

もちろん、朝食を運んで来たのはフェルム。

朝食を食べるスタンリーの顔をずーっと見つめている。

スタンリーが視線を感じて顔を上げると、また眼をそらす、ようなことを、何度も何度もやっていった。

ちなみに、フェルムの顔は赤い。

それに気づいたスタンリーは声をかけた。

「オイ、どうした？」

「ひゃい!？」

フェルムは奇声を上げて椅子を倒した。

「い、いやその、ただ、男の子だなーって思ってた……」

テンパリながらもなんとか絞り出したその声は小さかった。

「は？」

それをなんとか聞き取ったスタンリーも彼女の発言の意図が分からず、首を傾げていた。

「だから……うう、か、かつこいいなって！」

フェルムが真つ赤になりながら言った。

「そ、そうか、あ、ありがとう……」

美少女に『かつこいい』と言われて喜ばない男はいない。

スタンリーも顔をトマトのように真つ赤にして礼を言った。

なぜ彼女がこんなにもテンパっているのか。

それは朝にさかのぼる。

朝、スタンリーが日課の訓練に行つてしばらくたつたあと、フェルムは寝ぼけまなこで眼を覚ました。

天井がいつもと違うことに気がつき、訝しげに体を起こす。

そのとき、布団に男物の香水の匂いを感じた。つまりはスタンリー

の匂いを感じてフェルムは飛び起きた。

「うわわ！？？わたし、どうしてここに！？？」

彼女は教会内の部屋で寝ていたのだが、なぜか寂しくなり、スタンリーの部屋に寝にいったことは現時点では覚えていなかった。

「やば、うわー！こんな格好でスー君の横にいたなんて！？？どうにかなつちやうよ！！」

心臓が凄まじい速さで鼓動を続けている。

それはそうだろう。

好きな男の横で一緒に寝たのだから。（決していかがわしいことは起こっておりません。普通に寝ただけです）

幼なじみのような曖昧な関係とはいえ、意識するものは意識する。寝ている時に抱きついたたくましい背中感触とか、無邪気な寝顔とか。

いつの間にかスタンリーはかつこよく、凜々しくなっていたのだ。

小さい頃から一緒に遊んでいるために、なかなか気づかなかつたが、スタンリーは剣の稽古を始めてから、めきめき身長とかも伸びて来ていた。

もうさすがに止まったようだが。

昔、ビーストに襲われたときも、背中に庇ってくれた。彼は大きな傷を負ってまで私を守ってくれた。

変質者に追いかけられたときも、彼が追い払ってくれた。

フェルムを何度も命がけて助けてくれたスタンリーは、フェルムにとって、『私の勇者』なのだ。

自分を卑下することが多いスタンリーを励まし、支え続けて来たと言っ自負が自分にもある。

だから、絶対に付き合う。

と朝に決意を固め、喫茶店で会ったのだが、昨晚背中に抱きついていたの映像がフェルム脳内劇場で何度もリピートされ、1人で真っ赤になっていたのだ。

「フイー。おい、フイー！おい、フェルムー」

「うわい！？」

「お前どこに飛んでってんだ。そんな幸せそうな表情して」

あなたの背中に抱きついたときを思い出してました、なんて口が裂けても言えないだろう。

「時間だ。行ってくるよ」

なお、フェルムが再起動しないため、スタンリーの昼食はミリが渡しましたとき。

場所は変わって、帝国軍術学校正門前。

スタンリーはそこをくぐろうとしたその瞬間……背中からタツクルを受けて倒れた。

なんとか、地面とキスする事態は避けられたが。

「よお！スタンリー！昨日は大活躍だったんだってなー！よっ、色

男ー！」

快活そうな顔つきをしたこの灰色の髪 of 青年は、エリック・フリント。17歳。

スタンリーの親友で、帝国軍術学校の実技では次席だ。筆記は酷いものだが。

「お前いつまで背中に引っ付いてやがんだ！さっさと離れろ！」

ドゴオンッ！……、人を殴るにはおよそありえない音がした。

スタンリーが銃のバレルでエリックのこめかみをぶん殴ったのだ。

「ぐへっ！」

エリックは吹っ飛んで、後ろに来ていた女子生徒のスカートの下へと偶然潜り込んだ。

「え、きゃああああっっっ！」

悲鳴。

エリック、鼻血を出しながら親指を立てる。

「何やってんだ……！」

スタンリー、跳躍して、重力落下を乗せた膝落としを打ち込む。

「ゲベッ！」

エリック、悶絶する。

スタンリー、その反動で女子生徒の方に倒れ込む。

女子生徒、スタンリーを抱きとめる。

「スタンリー様あ」

女子生徒、なぜかうっとりとした表情でスタンリーを強く抱きとめる。

スタンリー、胸に顔をうずめる。

「むー、むー、もがー！」

周りの男子、妬む。

「スタンリーの野郎オオオオ！」

「やはり、『細身で程よい筋肉』じゃないとモテないというのか！？」

「いや、彼が紳士で優しいからじゃないかな。それに女子生徒のピ

ンチのときはなぜかかならずいるし、大体（ここから先はスタンリーに対する愚痴が延々と続いたために省略させていただきます）」

「何をやってるんですのオオオー！！！」

スタンリーが窒息しそうになったそのとき、蒼い髪を風になびかせ、1人の女子生徒がすごい勢いで走って来た。

彼女は背中にしよつていた大剣を抜き、剣の腹で、思いつきりホームラン斬りをした。

「よし、今日も一日愉快に過ごせ、なぼべばっ！」

エリックはまたも吹っ飛んでいき、女子生徒も竜巻に飲み込まれたかのようにすっ飛んでいった。

「うおっ!？」

スタンリーだけは、マト ックスよけをして無事であった。

「あぶねえなっ！何すんだ！クリステイナー！」

「スタンリー、無事でしたのね！」

その天然発言に、スタンリーは。

「お前が一番危ないわっ！」

ツッコミをいれた。

「まあ、そうお怒りなさらずに、行きましようスタンリー」

スタンリーと彼女　クリステイナーは腕を組み、スキップするよ
うな足取りで、中へ入っていった。

クリステイナー・アルドルフ。

帝国の貴族の1つである、アルドルフ家の長女である。

帝国貴族にはめずらしく、慈善事業や福祉、孤児の保護に力を入れており、帝国国民の信を得ている。

次期皇帝は、アルドルフ家の当主ではないのかという噂が帝国議会で囁かれている。

その関係で、クリステイナーはスタンリー達が暮らしている教会の孤児院に訪問したことがある。

その時、スタンリーはフェルムと一緒に孤児達の世話をしていたが、彼女の姿を見ると、冷たい眼になり、フェルムに「あとは任せる」

と言って、ビースト討伐へ向かった。

クリステイーナはフェルムにスタンリーがなぜあんなに冷たい態度をとるのか聞いてみると、彼女はこう答えた。

「彼は、この国の上流階級を憎んでいるんだよ。小さい頃に殴られたり、タバコの火を押し付けられたりしたからね」

そのフェルムの言葉にクリステイーナは絶句してしまった。

その後も、クリステイーナは教会の孤児院に足を運び、スタンリーと会話の糸口を掴もうとするが、彼は自分が来るたびに外へいつてしまう。

しかし、転機が訪れたのは、ちょうど10回目の孤児院訪問のときだった。

城塞の内側、つまり内城壁の外側は安全なため、子供達を遊ばせていたのだが、ビーストが出現した。

『ボーンビースト：ソードタイプ』

その名の通り、体が骨で出来ているビースト。

個体によって違いがあり、この地方に出現するボーンビーストは石剣を持っているため、『ソードタイプ』と呼称される。

それが3体現れた。

彼女はこの時、自分の装備である、大剣グレートソードを持っていなかったため、丸腰だった。彼女は女だてらに大剣を振り回すことが出来るのだが、さすがに丸腰では勝てるほど強くない。

絶体絶命の危機のとき、スタンリーが空中から、ビーストに飛びかかり、その動きを止めた。

3体を1太刀で倒したスタンリーの剣の冴えに、彼女は眼を剥いた。

「な、なぜ、助けてくれたのですか!？」

スタンリーは彼女の顔を見ようともしせず言った。

「別に……ただの気まぐれだ」

クリステイーナからは見えなかったが、ホツとした表情を浮かべていた。

「そうですか……」

その真意に気づいているのかいないのか、クリステイーナは笑顔を浮かべていた。

「とりあえず戻りましょう。またビーストが来てもまずいので」「ええ」

教会に戻り、自らの屋敷に戻ろうとしたクリステイーナをデイビット神父が引き止めた。

「クリステイーナ君、もう戻ってしまうのかね？」

「ええ、あんな事件もありましたし、彼には嫌われているらしいですし」

「スタンリーのことが……」

クリステイーナが沈んでいる表情を見せると、デイビット神父は少し考え込み、言った。

「助けられたとき何か言われたか？」

「ええ、私が『なぜ』と問いかけたら、『ただの気まぐれ』だ、と言っていました」

クリステイーナがそう言うと、デイビット神父は笑顔を見せた。

「なら問題はない。それはスタンリーの照れ隠しだ。あの子は少々ぶつきらぼうなのでな。安心した顔を見せたくはなかったのだろう」「ではなぜわたくしと話そうとはしないのです!？」

クリステイーナはもつとも気になっていることを告げた。

出会ったときから彼に惹かれていた彼女にとって、もつとも重要な問題だ。

「あー。それは多分、貴族のお嬢様と話したことないからじゃないか？」

「わたくしと何を話せば良いのか分からない、と言うことですよ!？」

クリステイーナの勢いに苦笑しながら、デイビット神父は「行って来たまえ」と手でスタンリーの部屋を示した。

コンコンッ！

ドアのノックを2回。

その間に息を整える。

「どーぞ？」

スタンリーの気怠げな声が聞こえた。

疲れているのかと心配しながら、クリステイーナは恐る恐るドアを開けた。

「失礼します……」

そろそろと自らの部屋に入って来たクリステイーナを見て、スタンリーは疑問符を浮かべる。

「ああ、あなたか。何か御用ですか？」

ベットに寝転がっていたスタンリーが言う。

「い、いえ……先ほどの礼をと思いまして……」

クリステイーナは俯きながら言う。

「ははっ！礼なんていりません」

スタンリーは初めて笑った。正確には、クリステイーナと話している時に始めて笑った。

その快活で少年のような笑みにクリステイーナの心は引き込まれた。

「いえ、でも……」

まだ俯いているクリステイーナに対し、スタンリーは笑ったまま言った。

「むしろ礼を言うのはこちらのほうです。チビどもの世話をしてくれてありがとうございます」

その言葉にやっと顔を上げたクリステイーナ。

「いえ、これも良い経験になりますので」

とテンパリながら出した言葉は貴族の責務、のような言葉だった。

「何をそんなに緊張しているのです？あなたの方が身分が上なのですか？」

そう訝しげに聞いて来たスタンリーに「あなたのことが気になっているのです」などとは言えないクリステイーナは、

「……、と、殿方の部屋に入るのは初めてですの」と返すのが精一杯だった。

「そうですね……」

その言葉を最後に沈黙が部屋を覆う。

スタンリーにとっては苦でもなんでもなかったが、色々と焦っているクリステイーナはなんとか会話の糸口を掴もうと、こう切り出した。

「そう言えば、自己紹介をしていませんでしたわね。申し遅れましたが、わたくし、アルフドルフ家の長女、クリステイーナ・アルフドルフと申します」

と言つて美しい礼を見せたクリステイーナにスタンリーは見惚れていたが、彼女がこちらを見てくるのに気づき、咳払いをしてから、自己紹介をした。

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

スタンリーは貴族式の礼など知らないなので、知っている最大限の礼騎士道に乗っ取った例をした。

それに対して、クリステイーナは「あら？」と声を上げる。

その視線に気がついたスタンリーは相好を崩して言った。

「俺の剣の師匠が騎士なのです」と。

クリステイーナが次に聞いたのはどこの学校に通っているかだった。「帝国軍術学校」と答えたスタンリー。

その返答に喜色満面の笑みを浮かべ、「同じ学校でしたか！」と喜ぶクリステイーナ。

それから2人は学校の話で盛り上がった。

スタンリーは彼女が学校で5本の指に入る実技成績の持ち主だと知り、非常に驚いた。

その美貌と立ち振る舞いから、『ブリュンヒルデ戦女神』と異名を持つことも、恥ずかしいのか顔を赤らめながら聞かせてくれた。

クリステイーナにとっては、彼の性格が自分の思っていたよりずっと穏やかなものだとして、さらに気になる男性となった。彼の立

ち振る舞いのなかに覗く芯の通った確固たる信念も彼女にとって心地の良いものだった。

2人が話を終えたのはもう、太陽が山の向こうへ沈んでしまった時間だった。

「もうこんな時間です。お送りします」

スタンリーがそう言って椅子から立ち上がる。

「え？あ、そうですね」

クリスティーナは名残惜しそうにスタンリーの部屋を見回し、伸ばされたスタンリーの手を取った。

教会の、子供達の『また来てね』という声に見送られながら、教会地区の入口まで来た。

「では、お気をつけて……」

「ま、待ってください。わたくしに対しては敬語は禁止です！わたくしのことも呼び捨てで呼ぶことっ！」

「は？」

急にそんな事を言われたスタンリーはきょとん、とするが、数秒でなんとか理解し、了承した。

これがスタンリーとクリスティーナの出会いの結末であった。

クリスティーナが懐かしい出会いの記憶に思いを馳せているとき、全校集会ではスタンリー達を見送る、として1対1の実戦訓練大会が始まることと決定していた。

第六話 戦女神（ブリュンヒルデ）（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は実戦訓練の模様を書く予定です。
それでは。

第七話 生徒会長（前書き）

またも新キャラ登場です。

今回は仕事のできるおねーさん！？

そしてスタンリーの出生の秘密の一片とは！？

第七話 生徒会長

一対一の実戦訓練大会は全校生徒によって催されることが決定していた。

これを独断で決め、教論達にはかつたのは生徒会長。

軍術学校始まって以来の天才と称され、絶世の美貌さえも持つ彼女の圧倒的なカリスマに、全校生徒は息を飲むことすら出来ない。

「どうも、皆さん。生徒会会長のエルフィーネ・リーベルトです。

今回、4年生の1年間の実戦研修の旅路を祝して、大武術大会を開こうと思っています。優勝商品は……………」

そこで彼女はもったいぶって、息を溜めたあと、宣言した。

「『私との一日デート券』です！！」

校庭がどよめいた。

言うまでもなく彼女は無数の男性から思いを寄せられている。

少し前に貴族に求婚されたとか。

そのあまりのカリスマゆえ、一部の女性から、百合的尊敬を受けている……………らしいが良く知らない、というかそついうことはあまり知らない方がいいと思う。

そして彼女はスタンリーになぜか一目置いている。

彼女曰く、「将来、大物になって私たちの度肝を抜きそう」だそう
だ。

まあ、彼女の推測はある意味では当たっていたことになる。

ちなみにスタンリーは今どうなっているかと言うと、エルフィーネの発言に「もう少し自分を大切にしろよ……………」と言わんばかりに彼女を睨みつけたあと、頭を抱えていた。

スタンリーにとっては、自分を気にかけてくれる存在だけに、「何かあったら……………」という心配があるのだ。

スタンリーはあまり自分の心配や弱い面を表に出さないで、表には分からないが、意外と彼は心配性なのだ。

このときの彼も、デイビット神父や、フェルムが見れば、エルフィーネを心配している様子がありありと分かったことだろう。彼女もそれに気づいたのだろう、スタンリーに向かって茶目っ気たっぷりな魅力的な笑みを送った。

スタンリーはその笑みに気づいて、いつもの穏やかな相好を崩し、へにやり、と力のない笑みを作った。

スタンリーがいた辺りは、いっそうどよめいた。

スタンリーとエルフィーネ。

実はこの両者、ものすごく相性がいい。

笑顔や、目を合わせただけで会話が出来るのだ。

エルフィーネはスタンリーに笑顔を送ったあと、また前を向いて言った。

「なお、対戦表は我々生徒会の方で組み上げてあります。朝のHRでプリントが担任の先生から配られると思いますので、詳しくはそのプリントを見てください。では、皆さん優勝目指して頑張りましょう！我々生徒会も参加しますのでどうぞよろしく！」

エルフィーネは一旦壇上から降りた。

「では、次に表彰と、生徒の方に届いた手紙を読み上げます」

『生徒に届いた手紙を生徒会長が読み上げる』 エルフィーネが生徒会長に就任してから新しく始めたことだ。

このことにより、手紙が届いた生徒を中心に絆を深めてもらおうという狙いらしい。

しかし、スタンリー曰く「あの人が面白いからやってるのさ」だそう。

エルフィーネが何を考えているのか分からないのが実情だそう。表彰で名前を呼ばれたのはスタンリーとあと1人。

運動部の男子だった。

突然名前を呼ばれたスタンリーは驚いたような表情をした。

だが、壇上に昇り、『帝国警察総監賞。貴殿は先日起きたアイテムシヨップ占拠事件 云々』

と言われたことで気づいたのか、きよとんとしていた表情を引き締めた。ようはミリの事件だ。

彼の表面上は感じられないが、以外と熱血漢なところが伺えるのはここにある。

彼のもともとの気質なのかはよく分からないが、彼はなぜか事件に遭遇しやすい。特にフェルムのことだ。

いくら幼なじみとはいえ、普通ならば見捨てるほどのことさえ、自らの危険を顧みず飛び込んでいくようなまっすぐさ。

まさに、彼に助けられた子供や女子から見れば、彼はヒーローなのだ。

自らが差別される位置にありながら、他人を助けようとする底抜けの優しさ。

少々ぶつきらぼうながらも、手を伸ばす面倒見の良さ。

しかし、彼はただのお人好しではない。

自らを差別するような人間には冷氷のような冷たい態度を取るし、貴族の息子、娘からの上から目線の命令などは、辛辣な言葉でぶつた切る。

自らを認める人間しか心を開かない一匹狼なところもある。

彼が軍術学校でモテているのも、そのような性格からだ。

しかし、スタンリーは幼いころには敵意しか向けられなかったために、自分や仲間への敵意には非常に敏感だが、自らへの好意には核爆弾級に鈍感なのだ。

もう1人の授賞式が終わり　　陸上部で優秀な成績を……どうたらこうたらということだった。

手紙の読み上げに移るとき呼ばれた名前はまたもスタンリーだった。ついでにエリック。

エリックは何の手紙か分かっているようで、平然としていたが、スタンリーは不審がったような表情を浮かべていた。

「えー、エリック・フロント君。妹さんからのお手紙です。内容は
エリックは家族からの手紙だった。妹からの『元気になっていますか？』という健康を気遣う内容で、スタンリーは少し羨まじげな表情をしていた。」

「続きまして、スタンリー・アークエッジ君。フェルム・ヴェンジ
エンスさんからのお手紙です」

その名前を聞いたときスタンリーは盛大に吹き出した。
周りの男子達はスタンリーを睨み、女子達は警戒を深めていた。
恋する乙女としての勘がそうさせるのだ。

「内容は」
とエルフィーネは美しい声で朗々と読み始めた。

『急にごめんね！』

『デイビットさんがね、スー君に重要な書類を渡し忘れてたんだっ
て。今日の3時までにはギャラクシア公社に提出しなければいけない
んだけど……』

『でも、デイビットさんは教会の仕事があつて、離れられない、だ
よ。だから、私がスー君のところに行っても大丈夫かな……？』

『お昼休みぐらいに行くからよろしく、だよ！ あなたのフィーよ
り』

いつもの口調の会長ではなく、フェルムの口調で話す会長を見て、
そのギャップにスタンリーは笑いがこぼれたが、会長はそれさえも
魅力的にこなすと、スタンリーとエリックに笑顔を向けた。

「何か補足はあるかしら？」

「いいえ、俺はないっす」

エリックはそう言ったが、スタンリーは違った。

「1つだけ、よろしいでしょうか？」と。

「ええ、構わないわ」とエルフィーネ。

そしてスタンリーはマイクを掴むと、壇上上がり、女子に人気の
あるその鋭い瞳で全校生徒を見回した。

そして口を開いた。

「皆さん、どうも。スタンリー・アークエッジです。えー。俺からは1つだけありますので、良く聞いてください。特に男子の皆さん！」

そこで、スタンリーは1度言葉を切ると、息を吸い込んで言った。

「フィーに手エだしたら問答無用でぶった斬ります！以上！」

彼の目はいつものように穏やかな光を宿してはいない。それどころか目の奥に炎さえも見えた……：ような気がする。

そんな彼からマイクを受け取るとエルフィーネは穏やかに言った。

「質問はありますか？」

「はい！」

と1人の女子生徒が手を挙げた。

髪をくるくると縦ロールにした女子生徒で目鼻立ちの整ったなかなかの美人だった。

しかし彼女は貴族の出身でお高く止まっているため、スタンリーに対しても上から目線になるところがある。

クラスの女子をまるで牛馬のように使うところも見ているため、スタンリーは彼女のことを親の敵のように嫌っていた。いや、スタンリーの親は誰か分からないんだけどね。

「スタンリー様とフェルム様のご関係は！？」

「どうなのかしら？スタンリー？」

とウインクしながらマイクを渡すエルフィーネ。

「えっと……俺とフィーは、まあ、幼なじみみたいなもんです」

「少なくとも愛称で呼び合うほどには友好的な関係なのね？」

とエルフィーネ。

自らが誓ったことを口に出すと、とても痛い台詞しか出そうにないと一瞬で考えたスタンリーは、そのすべてを知っているようなエルフィーネの瞳に向けて言った。

「ええ……」

そして、縦ロールの女子生徒のほうをさりげなく見ながら言った。

「フェルムを泣かせるような真似をしたら女子生徒だろうが男子生徒だろうが、問答無用で潰しますので。よくよく頭に叩き込んでおいてください」

彼は縦ロールの女子生徒が一瞬だけ考えた企みを見抜き、さりげなく牽制してから、自分のクラスの列へと戻った。

午前の授業が終わり、昼になった。

フェルムが作った弁当は、卵のサンドイッチと、ツナサンド、ポテトサラダというようなものだった。

それをすぐ食べ終わると、フェルムが来るのをじっと待っているスタンリー。

お前は忠犬八千公かっ！

スタンリーが待ち始めてから10分後、ドアからちよこつと顔が覗いた。

そのままのその顔はクラスを見回し、スタンリーを見つけると、天真爛漫な笑みを受かべると同時にドアが開き、フェルムが飛び込んで来た。

「スー君！」

彼女はスタンリーに飛びついた。

そんなことやったらクラスの女子では避けられるのだが、スタンリーは彼女を受け止めた。そこにスタンリーと彼女の絆を感じて女子達は歯噛みする。

「フィー！」

そのまま2人の唇が近づいて……。

「ってそんなわけあるかっ！！」

うおう！地の文にツッコミを入れられた。

「スタンリー？誰と話してるの？」

スタンリーはフェルムを抱きしめたままだった。

耳元で大声を出されたらそれなりに驚く。

「いや、何でもない」

と言って、フェルムから離れ、彼女を観察するスタンリー。

フェルムは麦わら帽子に淡い桃色の膝丈のワンピースという格好で綺麗というよりはかわいいというのが正しいだろう。

「似合ってる。かわいいよ」

スタンリーの無自覚なところは率直に褒め言葉が飛び出して来るところだ。

しかも、無意識に褒めて欲しいところをついてくる。しかし、鈍感であった。どうしようもなく、好意に鈍かった。

フェルムは顔が赤くなっている。

スタンリーは周りの男達のなめるような視線がフェルムに集中していることを感じ、彼女の手を掴むと、一目散に駆け出した。

向かう先は生徒会室。

あそこは安全だ　そう考えつつ、スタンリーは最上階へと階段を駆け上がった。途中フェルムがバランスを崩して危なかったのをどうにかキャッチすると、そのまま横抱きの体勢へと移行、廊下を疾走して、生徒会室に滑り込んだ。

「あら、2人で愛の逃避行？」

しまった。この人がいたんだった。

笑みを浮かべて2人に詰め寄ってくるエルフィーネ。

彼女は全体的に余裕を感じさせる態度。しかし嫌みではなく、どこか人を落ち着けるような雰囲気がある。けれどそれとは逆に浮かべた笑みはイタズラっぽく、違う意味で2人を落ち着かなくさせる。

つまり、何かされるんじゃないかという、おかしな不安。向こう側が見えない不透明性。神秘的　　というと、褒め過ぎだろうか。

「あいつ、あなたは」

「あつ」

2人の後ろへと視線をずらすエルフィーネ。それにつられて2人も後ろに視線をやる。

「引つかかったなあ」

楽しそうに笑いながらフェルムの頬をむにゅと押ししていた。

「わうっ!?!」

それに驚くフェルム。

他にもフェルムに対して色々なイタズラがされている。

「会長、それくらいにしてください」

これ以上美少女2人の絡みの構図があると自分の何かが崩壊しかねない、と本能で感じたスタンリーはとっさに止めにはいった。

「会長……?」

かわいらしく小首を傾げるフェルムに理性が崩壊しかけたが、どうにか耐えて、エルフィーネを紹介しようとする。

フェルムの危険なところは1つ1つの動作が可愛さが秘められており、美少女なのと相まって、まるで野に咲く一輪の花のような清純な雰囲気漂って来るところであった。

「ふふ、私はエルフィーネよ。よろしく。フェルムちゃん」

「あ……、はい」

「フェルムちゃんのこととはスタンリーからよく」

なぜ自分の名前を知っているのかフェルムはまた首を傾げたが、スタンリーの名前が出ると俄然目が輝きだした。

「言わせねえよっ!?!」

はい、フェルムが持つて来たギャラクシア公社のハンター契約延長の書類にサインをしているスタンリーのツッコミが入りました。

自分のあの惚気とも言えるフェルム自慢を聞かせたくなかったんでしようね。

あれだけのことを言っておいて付き合っていないっておかしいですよ
ね。

何か書いてて僕もむかついてきました。

「あの、スタンリーとどういう関係なんですか?」

スタンリーに好意を持っていて彼女からすれば当然の質問だった。

「上司と部下ってところかな?」

相変わらず、真意の読めない笑みで言う。

「俺がいつあなたの部下になったんです？」

スタンリーは苦い表情を見せた。

「あなたの『牙』になることは承諾しましたが、『部下』になることは言ってませんか？」

自らを束縛されることを嫌ったスタンリーはエルフィーネとある協定を結んだ。

あなたの『部下』になるのではなく、あなたの『牙』になろう、と。その代わり、稼業の賞金稼ぎで得た情報をあなたに送ろう、と。

スタンリーはエルフィーネと初めて顔を合わせて会話した瞬間、彼女の正体を察した。

もともと、彼の剣の師匠である、カルシウス・シグマー元帥から漏れ聞いた話だったのだが。

すなわち、皇帝直属の秘密情報機関を預かる家の出身だと気づいたのだ。彼はエルフィーネがもう秘密情報機関で働いている事を後で知り、彼女を暗部に引きずり込んだ彼女の父親に激しい怒りを覚えしたが、さすがに他人の家の問題に鑑賞しようとするほど馬鹿ではないし、そこまで熱血って訳でもないが、彼女が危機のときは迷わず助けにいくだろう。

スタンリーはそういう人間だ。

ちなみにスタンリーは軍術学校での異名は『牙狼』^{ガロウ} またの名を『生徒会長の牙』

この軍術学校では、最強の者、つまりは生徒会長を、実技試験で全体の次席、並びに3番手の成績を取った者が補佐しなければならぬという校則がある。

スタンリーは実技では3番目、筆記では50番以内に入る。総合成績では10番以内に入る成績優秀者だ。

さらに教会地区の唯一の賞金稼ぎであるために、エンパイアⅡシテイではそこそこの有名人だ。

彼に好意的な人は『大切なものを守るためなら、命さえも捨てる覚悟のある少年』^{キロー}

彼を嫌っている人は『英雄気取りの偽善者』

見事に評価が割れる。

だが、彼を良く知っている人々や、彼の覚悟、信念の一端を見た人々は口を揃えてこう言う。「スタンリーは賞金稼ぎのトップの『伝説』^{エント}に似ている」と。

これは何を意味するのか。

それは後に世界が驚愕する事になる真実の一片を示していた。だがそんな事に気づくはずもなく、スタンリー達はお茶を楽しんでいた。

午後からは、実戦訓練大会の予選が始まる。スタンリーはAブロックの第1戦目に当たっていた。

だから、今の内に体を温めておかなくてはならない。

フェルムも一番忙しくなる時間帯になる。彼ら2人は門で抱き合い、別れを惜しんだあと、それぞれの道へと戻っていった。

それを生徒会室から見下ろしながら、エルフィーネは言った。

「あれだけのことでつきあっていないのだから、2人の鈍感ここに極まれり、ってとこね」

苦笑まじりに言ったその言葉に影のように控えていた2人が反応した。

「日常を監視していても、あんな感じですよ」

「いつも、オレンジ色の空気を振りまいてます」

顔も体つきもそっくり、この2人、双子である。

「そう、まあいいわ。シグマー元帥が特別に目をかけるんだもの。

彼にはきつと何かがあるわ」

「質問なんですけど、彼が一年間の研修に出た場合はどうしますか？」

「陰ながらついていって。ばれないようにね」

「了解しました」

双子のぴつたりとした返事。

彼女はそれを耳に聞きながら、傍らの書類に目を通した。

そこにはスタンリーの顔写真と経歴が。

そして皇帝陛下直々のサイン。

よほど重要な案件なのだろう。

「一体彼の出生にはどんなサプライズが隠れているのかしらね……」
エルフィーネはそう呟き、書類の二項目をじっ、と見つめた。

そこに書かれていたもの、それは、スタンリーの母親について、一番可能性が高い人物について。

二国間戦争のもう一つの主役、ドラクシル王国の王女であった。

第七話 生徒会長（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちなみに、エルフィーネのモチーフは、弓弦イズル先生の作品『インフィニット・ストラトス』に出てくる、更識楯無です。それでは。

第八話 大会（前書き）

今回もヒロインが出ます。スタンリーと一緒に旅はしませんが……。
っていうか、彼は一対何人の女の子を引っ掛けているんでしょうか？
リア充が羨ましい……。。

第八話 大会

午後になった。

いよいよ、大武術大会が始まる。

スタンリーは準備体操をしながら、自分がどのブロックで、何回目
に一回戦を戦うのか、それを確認する。

Aブロック一回戦。スタンリー・アークエッジVSシャーロット・
サーバス。

彼は対戦相手の名前を見たとき、思わず溜め息を吐いた。彼女
シャーロット・サーバスは1年前にチームを組んでいた事のある少
女だ。スタンリーより1つ年下。使う武器は片手剣二本。すなわち、
二刀流だ。

筆記はほとんどの教科が赤点と悲惨で色々と絶望的なのだが、実技
は10本の指に入るといって、とても優秀なものだ。

「スタンリー、誰が相手だ？」
声をかけて来たのはエリック。

「シャーロットだ。何でいきなり知り合いと戦わなきゃならんのだ」
と苦々しげな顔で吐き捨てたのはスタンリー。彼は手の内を読まれ
るのを嫌うため、まあ仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「そオかい。まあがんばれよ」

と言ってエリックは自分の客席へと戻っていった。スタンリーはそ
れに手を挙げて答え、練習用のゴムで作られた剣を手に取る。

試合形式は、3撃入れた方が勝ち、という至極簡単なものだ。

スタンリーは1つ息を吐くと、練習用の剣をいくつかの教えられた
型に従って振り回し、剣を体に馴染ませる。

呼び声がかかった。いよいよだ。

「Aブロック一回戦、スタンリー・アークエッジVSシャーロット・

サーバス!!」

競技場に歓声が響く。スタンリーはその喧しい歓声を鬱陶しいと思いつながら、自らを待っている少女の元へと歩いた。

「遅いですよ先輩。シャロは待ちくたびれたですよ」

鮮やかな桃色の髪を左右で縛ったツインテールに同色の瞳の美少女が口を尖らして待っていた。まるで待ち合わせに遅れた彼氏を怒るような口調でスタンリーを咎める。

「悪い、生徒会長のところには用があつてな」

スタンリーは苦笑まじりに告げる。

「そんな事言つたつて信じられないですよ!先輩はいつも女の子と一緒にいるんですよ!」

目につるうると涙をためて言うシャーロット。スタンリーに恋する乙女としては当然の事だろう。

それに気づいた観客席の男達が殺気立つ。

もちろん、シャーロットはそのかわいさゆえ、男達に人気がある。

彼女の独特の口調もあるだろうが。

彼女は語尾がほとんど「」ですよ」をつける、自分のことを「シャー」と言う。

しかし、スタンリーが分かっているのは彼女が『かわいい』と言う事だけで、自分に対し好意を持っている事など、みじんも分からない。何とも罪作りな男である。

鈍感男でも、目の前の美少女が自分を責め、涙をためたら、さすがに悪いと思う事があるだろう。

スタンリーは頭を掻きながら言った。

「すまない、泣かないでくれ。俺はお前に泣かれると、どうすればいいのか分からないんだからさ」

と言いつつ、シャーロットを抱きしめるスタンリー。鈍感なくせにこう言う時に何をすればいいのか分かっているのはとても憎たらしいものである。

彼女の小柄な体は、すっぽりとスタンリーの腕の中に収まった。

「じゃあ、シャロが勝つたら、先輩とデートしたいですよ」
抱きしめられながら、そう言った。

スタンリーは呆れたように溜め息をついて、彼女の頭を撫で、それを承諾の合図にした。そして、2人は離れる。

審判の旗があげられ、それが開始の合図になる。

旗が揚げられたと同時に、シャーロットはまるで弾丸のようにスタンリーに向かって駆け出した。

スタンリーはその突進をひらり、と回転しながら跳躍して避ける。

その次の瞬間、2人は激突した。というわけではなく、スタンリーがシャーロットの二度目の突進を迎え撃ち、彼女の両手に握られていた武器を、その両手を打つことで叩き落とし、これで2撃。最後は面に1撃入れて、圧倒的な力の差で、スタンリーの勝利と相成った。

「むう〜！先輩とデートできなかったですよ……。残念ですよ」
彼女はしゅんとしてしまった。

スタンリーは苦笑しながら、その頭を撫でる。シャーロットは目を閉じて、その手の感触に身を委ねた。顔が少し赤くなっている。

スタンリーは2回戦、3回戦を楽々と突破し、準決勝の生徒会副会長を苦戦しつつもなんとか倒し、決勝へと駒を進めた。

そこに待っていたのはクリスティーナ・アルフレッド。

「やはりあなたでしたか、スタンリー。さあ、雌雄を決するときです！いざ、勝負！」

スタンリーとクリスティーナ、この2人は前回戦ったとき、決着がつかずに終わったのだ。スタンリーはともかく、クリスティーナはその強烈な自尊心ゆえ、この戦いを待ち望み、燃えに燃えていた。

「ハッ！そオカよッ」

スタンリーはそう言って、ジャンプし、そこから急速落下して剣を叩き付けた。それをなんとか防いだクリスティーナは脇に構えた大

剣を一回転させて強烈な斬撃を放った。

「あぶねっ!!」

スタンリーはそれを間一髪で避けると、袈裟斬りから払い斬り、回転斬り下ろしと連続して斬撃を繰り返した。それを防ぎ、手元が狂ったクリステイーナへ横一闪、強烈な斬撃が襲い掛かり、彼女の体を吹き飛ばした。凄まじい威力である。

それもそうだろう。人間より遙かに強力な体を持つビースト（最低クラスとはいえ）を倒して来た男である。彼の身体能力は一般生徒のそれとは大きく一線を画している。

「ワンダウン」

と不敵に笑ってクリステイーナを挑発するスタンリー。

「くっ……」

それに対し悔しそうに歯噛みをして、再び駆け出すクリステイーナ。クリステイーナは貴族のお嬢様であり、実戦経験など、ほとんどなにに等しい。そこが余裕のあるスタンリーとの決定的な違いであった。

彼女は必死に剣を振るって攻撃を叩き込むが、スタンリーは口元に笑みを浮かべたまま、ひらりひらりと斬撃をかわす。避けきれなかったものは上手く剣で弾いて、受けながす。

スタンリーは彼女の縦回転斬りを半身になってかわすと、そのから空きの脇腹へ蹴りを打ち込んだ。

「きゃあっ!!」

蹴り飛ばされ、尻餅をつくクリステイーナ。

スタンリーは「はっ!」という気合いと共に跳躍し、空中で腰をひねり、剣を背中に背負うようにして構えると、気合いと共に片手袈裟斬りに振り下ろした。

「ツーダウン」

そう言っ指を二本立てるスタンリー。

「ラストだ、じゃあな」

そして、スタンリーは上段に構え、兜割り。その脳天へと剣を振り

下ろした。あまりに強い力で振り下ろしたためか、彼女は意識を失っていた。

Aブロック決勝、勝利者、スタンリー・アークエッジ。Aブロック代表に選出されました。

そうディスプレイに表示されたのを見て、彼は額の汗を拭い、ふー、と長い息を吐いた。

代表者として選出されたスタンリーに立ちはだかるのは、Bブロック代表者、エリック・フリント。

「やっぱりお前か、エリック」

先ほどとは違い、厳しい表情でスタンリーは言う。

その両目はいつもより鋭くなり、エリックを冷たく見据えている。その眼光はまさしく狼だ。

「おいおい、なんでそんなに怖え表情してんだよ」

エリックもいつもと同じおちゃらけた口調ながらも、その雰囲気は一変、まるで一本の剣のような雰囲気漂っている。

「っは！」

短い気合いを吐き捨て、エリックはジャンプ。

「ふっ！」

同じく気合いを吐き捨て、スタンリーもジャンプ。

2人の体と体、剣と剣が空中で交差した。

すぐさま向き直ったスタンリーにエリックの電光のような剣が頭上に落ちかかってくる。それを難なく受け止め、スタンリーは胴抜きを繰り返す。

やはりエリックも難なく受け止め、そこから2人は高速の剣舞へと移行した。その剣の速さは鍛えられた教師達の目を持ってしてもその軌跡を負えない速度。

今年の4年生には天才が3人いる　　そう言われる由来のうちの2人だった。

100年に1人の天才と呼ばれる、生徒会長、エルフィーネ・リーベルト。

剣術の天才と呼ばれる、実技成績次席、エリック・フリント。そして、戦闘の天才と呼ばれる、異常とも言える闘争センスを持つ少年、スタンリー・アークエッジ。

2人の天才の決着は唐突についた。

スタンリーが無数の突きを放ち、それを受けきれなかったエリックは3撃浴び、膝をついた。

「は、ハハ……。腕を上げたな、スタンリー、俺の負けだ」

「……………、フン、お前の腕が落ちたんだろ」

そう言つて2人の天才は、握手を交わした。

これで最後の対決となった。戦うのは、エルフィーネ・リーベルト VS スタンリー・アークエッジ。

エリックと対決したときよりも激しい戦いになるだろう。

この戦いを見ていた生徒達は皆そう思った。だが、それとは裏腹に2人は向かい合ったまま微動だにしない。剣と槍では間合いが違う。それゆえに試合は硬直状態に陥った。空気に緊張をはらんだまま、永遠とも言える時間が経過した後、スタンリーが動いた。

剣を地面と水平に。腰のところへ剣を持って来て、剣先は己が背へと導く。腰を落とし、僅かに腰をひねる。居合の構え。

スタンリーはその構えの状態のまま、まるで宙を走る一条の矢のように疾走した。

「ハアアアアツツ!!」

スタンリーの口から凄絶な気合いがほとばしると同時に、まるで流星のような居合剣がスタンリーの腰から繰り出された。

「やあツツ!!」

エルフィーネも短い気合いで応じ、その手に持った槍を突き出した。居合と突き出された槍がぶつかり、弾かれる。

エルフィーネは長い柄の先で、スタンリーの顎を狙う。

それをバックステップで避け、素早く踏み込み、大振りの一撃を加えようとするスタンリーだったが、その一撃は打ち下ろされてきた槍の穂先で打ち落とされ、すかさず繰り出された一突きがスタンリーの腹に決まる。

「ッッ……」

スタンリーはその衝撃に顔を歪めた。

エルフィーネは二撃目を繰り出そうとするが、そこで停止してしまった。

なぜか？

競技場の天井をぶち破り、巨大なビーストが現れたからだ。

場は騒然となり、パニック状態になった。そんな観客には目もくれず、巨大なビーストはスタンリー達へと歩いて来た。

呆然としているエルフィーネとスタンリー。

このとき、スタンリーの宿命の鐘の音が確かに鳴り始めた。

彼に最初の試練が訪れようとしていた……。

第八話 大会（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はスタンリー、ピンチ！？そして、襲撃して来たビーストの正体とは！？

第九話、波乱のバトルの幕開けです！！
それでは。

第九話 危機（前書き）

今回物語にとっても重要なキーマンが出ます！
そしてスタンリーはどうなるのか！？

第九話 危機

その巨大なビーストを見て、スタンリーが顔色を変えた。

そして、競技場に出て来ていた教師陣に向かつて咆哮する。

「なんで上級ビーストが侵入しているんだッッ！！帝国防衛軍は何してるッッ！！」

いつもの冷静な声音と違い、その声音は切迫している。それだけで周りの生徒達はこの事態が尋常じゃない事を悟った。

「北門を突破された！ビーストの総数、150体以上！繰り返す！

……」

けたたましいサイレンの音と共に、避難勧告が出される。しかし、遅すぎた。もうすでに居住区に被害が出始めている。その事実にスタンリーは血が地面に落ちるほど強く拳を握りしめ、唇を噛んだ。

「あれは……一体……なに……！？」

エルフィーネでさえその美しい顔かんばせを蒼白にしている。

「あれは、ボーンビースト：キングタイプ……。普通は、外城壁のさらに外、コペン平原にいるはずの上級ビーストだ」

『ボーンビースト：キングタイプ』

その名の通り、ボーンビーストの頂点に立つビーストだ。その体躯は『ボーンビースト：ソードタイプ』の数倍。それに合わせるように、持っている剣も巨大なものである。スタンリー達に言える事：

…それは1つだけだ。今のスタンリー達では、勝てる相手ではない。

いくらエルフィーネが100年に1人の天才であろうとも、エリックが剣術の天才だとしても、現役の賞金稼ぎバウンティハンターで、異常な闘争センスをを持つスタンリーをもつてしても、決して勝てる相手ではない。

そこにあるのは、圧倒的な力、生命力の差。キングタイプからすれば、彼らは蟻程度の存在ですらない。有象無象の1つでしかない。

熟練したハンターならば、容易く倒せる相手だが、いかんせんスタンリーには、経験が破滅的に不足していた。

さらには、このビーストがいた場合、ボーンビーストは大量発生する。しかも、まるで統制された軍隊のようになる。

上級ビーストというのは、普通のビースト達を統制する指揮官クラスのビースト。ビーストの種類に応じて、ボーンビーストならボーンビースト、ビーストタートルならビーストタートルの上級ビーストと種別に応じて存在している。

しかし、通常のビーストがなぜ、上級ビーストになるか。それはまだ解明されていないメカニズムだ。

出現しただけで街1つを滅ぼすと言われる最強級のビースト、通称『ハウンドビースト賞金首』達ほどではないにしろ、街に出現した場合、街に甚大な被害を及ぼす。

「くそっ！エリック、ここで食い止めるぞっ！！」

スタンリーは、腰の剣を抜きビーストの大軍へと突撃していった。

彼の脳裏にあるのは、教会地区の人々の笑顔。最初に浮かんできたのはフェルムの自分を呼ぶ声。

ギンッ！

スタンリーの中で何かが目覚めた。

「オオオオオオオツツ！！！」

自らの思いを乗せた咆哮。

彼の眼はエリック達からは分からないが、紅く染まっていた。

それを遠くから見つめる人影が1つ……。顔を覆うスカーフとゴーグルで、顔は分からない。背中には美しい剣を背負い、短剣一本で自らを襲ってくるビーストをあしらいながら、スタンリーを見つめている。恐ろしい技量と言わねばなるまい。

スタンリーとこの男が戦ったら、剣を合わせる間もなく、男から放たれている威圧感で膝を屈するだろう。

「フッ……不完全ながら、『力』が目覚めているな……」

この男はスタンリーの何を知っているのだろうか。

その横に神父服の人物が並んだ。

「フツ……しかし、『聖印』は目覚めていないようだな……『伝説』」

「デビット神父だ。その手には、大陸神話に伝わる七聖剣の1つ、『ブライトオブキング』が握られている。その事だけでも、デビット神父の技量がうかがえるだろう。」

「七聖剣……それは、大陸神話に伝わる英雄が振るったとされる七本の聖剣。選ばれたものしかその力を引き出せないと言われている伝説の剣だ。」

「デビット神父に握られている七聖剣『ブライトオブキング』は彼が剣を見つけたときのまま、変わっていない。」

「つまり、デビット神父では『ブライトオブキング』の真の力は引き出せなかった、と言う事だろう。」

長い沈黙の後、『伝説』と呼ばれた男が口を開いた。

「神話の通りならば、スタンリーがそうだ、焦る事はあるまい」
「デビット神父は真剣な表情をしていた。」

「あの子に、一目会っていかなくてよいのか……？」

『伝説』は口元に微笑を浮かべた。

「今会ったら、『彼女』との約束が違うから……」

それに対して、デビット神父も同じように笑みを浮かべ、口を開いた。

「フフフ……さすがに似ているな。」

「デビット神父のその言葉は、帝国軍術学校の方向から聞こえて来た轟音により、こちらには聞こえなかった。」

その言葉に、苦い笑みを見せた『伝説』は、一言。

「また会おう、デビット」

そう言って、住宅の屋根から屋根へとジャンプし、何処かへと去っていった。人間離れした身体能力というべきだろう。

残されたデビット神父はしばらく沈黙していたが、やがて独り言

のように呟いた。

「やはりあの子を放つてはおかんか……」

何に対してかは分からないが、苦しい表情を浮かべるデイビット神父。

少し時を戻して、スタンリー達はどうなっていたか……。

「数が多過ぎる！」

とエリック。彼は腹部に深い裂傷があり、そこから血が流れていた。「分かつてる！ここを守りきるしかない！ここを突破されたら、教会地区に雪崩れ込まれる！それに、教会地区を抜けたら居住区だ！どうにかしてここを支えろ……！」

と叫ぶスタンリー。彼は深い裂傷は負ってなかったが、全身に裂傷があり、そこから流れ出る血は確実に彼の体力を奪っていた。

「く……、これはさすがにきついね……」

とエルフィーネ。彼女はかすり傷ぐらいしか負っていないが、女性であるため、体力がエリックやスタンリーよりも少ない。その面影には疲労の色が濃い。彼女の持っているショートスピアも、疲労で震えている。

彼らはぼろぼろの状態ながら、なんとかここでビーストの大群を食い止めていた。しかし、もう限界に近い。

「チツ……」

スタンリーは舌打ちを1つし、『トライポーション』を飲み干した。

『トライポーション』

一緒に行動している仲間の体力（自分も含めて）の体力を最大体力の50%回復させる回復薬。

原理はよく分からないが、飲み干された『トライポーション』は皮膚から回復薬が空気中に拡散して仲間を回復するらしい。

「回復薬は残り何個？」

と、エルフィーネが男2人に声をかける。

「残り3つだ」

とスタンリー。

「ラスト、パーフェクトポーションが1つだけ」

とエリック。

「そう……。パーフェクトポーションは大事にしましょう」

そう言いつつもエルフィーネは突きを繰り出し、ボーンビースト一匹を排除した。

3人の周りにはビーストの死体の山が出来ている。

残っているのは、キングタイプの周りに集まった赤い角のボーンビースト。25体ほど。

スタンリーはそれには眼もくれず、自らの目の前にいたビーストに向かって、上段から斜めに振り下ろし、すぐさますくい上げるように上昇、二匹を一太刀で斬り倒した。

エリックは拳銃を取り出して、ビーストを撃ち抜いた後、別の一体に走り寄って、軽い跳躍と共に縦一文字に振り下ろした。

雑魚ビーストは何体も抜けていったが、それは後ろにいるクリステイーナやシャーロットが止めてくれるはず、と信じてスタンリーは不気味に沈黙を続けるキングタイプに眼を向けた。

「何が目的だ……」

といっても喋れない事は分かっているのだが、つい声をかける。

だが、キングタイプはまるでそれを分かっただかのように、前に進み出て、その巨大な石剣を掲げ、吠えた。

「ギャオオオオツツ!!」

その吠え声と共に突進してくるキングタイプ。

スタンリーはそれをなんとか避けると、跳躍し、頭の『核』^{コア}に向かって剣を叩き付けた。

「堅いな……!」

スタンリーはキングタイプを飛び越え、赤い角のボーンビーストのど真ん中に着地。

「あ……まずい」

この赤い角のボーンビーストは『デスケルター』と呼ばれている。姿形は、石斧を持った『ボーンビースト：パワータイプ』と同じだが、その力は桁違いに強い。今のスタンリーでは、一体を倒すのが限度だろう。

「やべっ！」

一体をドロップキックで吹き飛ばした後、スタンリーは全速力で逃走を始めた。『トライポーション』で少し回復した体力の無駄遣いだがそんな事は言ってもらえない。『トライポーション』で出血の止まった全身の裂傷もまた開き、全身が断続的に痛みに襲われるがそんな事は気にしてもらえない。逃げないと死ぬかもしれない。

そんな必死のスタンリーを25体のビーストが追い回すその絵はなぜか滑稽であった。

「のわあああああ〜っ！」

なぜだか間抜けな叫び声。

必死に逃げ回っているうちに救援に来た賞金稼ぎ達バウンティハンターに後を任せ、スタンリーはキングタイプの元へと急ぐ。

「くそっ！何なんだこいつは！」

巨大な石剣をかるうじて避けながら、斬撃を叩き込もうとするエリックだったが、肩口に一撃を食らってしまった。

「ぐああっ……！」

肩の骨を砕かれ、苦悶の叫びを上げるエリック。

膝をついた彼の頭へ決定的な一撃を打ち込もうとするキングタイプだったが、その攻撃は後ろからの強力な突きで潰えた。

「させないっ！」

エルフィーネだった。

「会長！エリックを連れて一時退避を！」

「あなたはどうするの！」

「俺はヤツを食い止めます。出来るだけ速く戻って来てくださいね？」

イタズラな笑みを浮かべ、エルフィーネの方へ顔だけ向けて言うス

タンリー。

それに苦笑を浮かべて、エリックに肩を貸して本校舎の方へ退避するエルフィーネ。

このまま、2人はすれ違い、背中合わせで離れていく……。エルフィーネはそんなイヤな予感がして、言った。

「必ず、帰つて来ること。これは会長命令よ」

「やれやれ、横暴な会長様だぜ……！」

と言いながらもしつかり頷くスタンリー。彼は前を向き直し、キングタイプにその狼のような瞳を向けた。

「さあ、シヨータイムといこうか！」

胸元に剣を構え、高速で突進、強力な突きを放った。

「ギヤオ!?!」

その凄まじい威力にキングタイプが少し後退する。スタンリーは突進力を利用した高速移動で無数の突きを放つ。その突きはキングタイプの胸の核コアに吸い込まれるように直撃した。

「セイツツ！」

スタンリーは恐ろしい速さで逆袈裟斬り上げを打ち込む。キングタイプは腕でそれを防ぐ。

金属と骨がぶつかり合うには高い音が響きスタンリーの長剣が弾かれる。

「おいおい、骨にしては堅すぎじゃねえか!?!」

薙ぎ上げて来るその巨大な腕を空中バツク転と言つ体操選手もびつくりな技で避けると、腰の『ミリタリー&ポリス：マークA』を抜いて撃つ。ほとんど一発に聞こえるほど速い二発の発砲音がした。

『ラピッドファイア』

そう呼ばれる早撃ちの技術。

しかし、放たれた弾丸はコアに命中したものの、たいしたダメージにはなっていないかったようだ。

「ハア〜。通常弾じゃ効きやしねえか」

彼がそう言つて腰のポーチから取り出したのは、赤い弾頭をもった

銃弾が入ったマガジン。マガジンから一発を取り出し、その弾丸をフォーティファイブの薬室に押し込み、その弾丸を形状記憶させる。このことにより、フォーティファイブは2種類の弾丸が撃てるようになった。

そして、ミリタリー&ポリスのマガジンを移し替え、構える。

「ハイドラ・シヨック弾、受けてみなっ！」

ハイドラ・シヨック弾。それは対ビースト用に開発された特殊な弾丸。弾頭に液体火薬が詰められており、敵に当たった衝撃で大爆発を起こす。人に対して使うものではないため、主に闇市場で取引される。『H・S弾』とよく表記されている。

しかし、反動も凄まじいため、スタンリー得意のラピッドファイアをすると、銃口が天に向かって跳ね上がるほどの反動が手首にかかる。

「つつ……」

痛みに顔を歪めつつも連射をやめないスタンリー。

「ギヤアアアアッ」

大爆発が核で連続して起こり、口から液体をまき散らし、悶え苦しむキングタイプ。

「グラアアアアッ!!」

キングタイプは足下の岩を切り飛ばし、スタンリーに飛ばして来たのだ。

「……」

それを避けられず、右肩に食らうスタンリー。

ミリタリー&ポリスを取り落とすが、それには構わず、懐からフォーティファイブを取り出し、またも連射連射連射。

「ぐつつ……」

撃ちまくる右手に怪我をしたため、さらなる負荷が右手にかかる。疲労で、手の感覚がなくなってくる。出血も酷い。

そのとき、エルフィーネが戻って来て叫んだ。

「スタンリーイイ!!」

キングタイプはその声の主に興味を持ったのか、エルフィーネに突進を始めた。

「会長っ！逃げるオオオ！！！！」

キングタイプの意図を察したスタンリーが絶叫とも言える声を上げるが、エルフィーネはぺたん、と地面に座ったまま微動だにしない。「会長ッ！なにやってんだ！速く逃げる、そこから逃げる！速く逃げるオオオ！！」

スタンリーが絶叫する。

エルフィーネはか細い声で言った。

「アハ……腰抜けて立てなくなっちゃった」

「エルフィーネ！」

スタンリーは初めて彼女を名前で呼び、全力で走って、彼女を背中に庇った。

バキッ！

何処か遠い所でそんな音がした。それと同時に、頭が割れるように痛い。最後の方でエルフィーネを見るとなぜか泣いていた。

スタンリーは声を振り絞った。

「エルフィーネ……泣くなよ……せつかく助けたんだ、あんたには笑っていてくれなきゃ困るんだよ……」

最後の力を振り絞り、彼女の美しい宝石のような涙を拭ってやった。

「エルフィーネ……俺のために泣いてくれるヤツがいたとは……ああ、他にも何人かいるかな……」

その言葉を最後にスタンリーは意識を失った。

その体にすがってエルフィーネはいつまでも泣いていた。声がかれでも泣いていた……。

「あの少年を死なすな！一人の女子のために体を張るような少年だ！この帝国を変えてくれそんな貴重な人材だ！全騎、突撃！」

警察署長フランク・ドーウェーが騎兵隊に命令を下した。騎兵隊は

ライフルを撃ちながら突撃していく。

しかし、泣いていたエルフィーネは気づかなかった。

「まったく、あの馬鹿は……。若く、無様、真っ直ぐ過ぎる……。あ、あ、そう言う馬鹿は好きだぜ！あの馬鹿弟子、命掛けて女助けるとは本当に馬鹿だよ！」

「あなたはそう言う彼を気に入っているようですね、元帥」

「まあな、副官」

そこに現れたのは皇帝騎士団総団長カルシウス・シグマー率いる選りすぐりの騎士団。

「さて、あの馬鹿弟子を救ってやるとしますかね。全軍、私に続けっ！」

馬を駆り、真っ先に敵陣へ飛び込んでいったのはシグマー総司令。

「まったく、なんてお人だ」

そう呆れつつも、副官も馬を走らせ、敵へと突撃していった。

「行けっ！」

その他の騎士達も剣を抜き放ち、次々と敵に斬り掛かっていった。ついに援軍が到着したのだ。あつという間にビースト達は掃討され、少し弱っていたキングタイプも、シグマー総司令に切り伏せられ、ビースト達の侵攻は終わりを告げた。

エルフィーネは救急車で運ばれていくスタンリーにずっと付き添っていた。

そんな救急車で運ばれていくスタンリーを見つめる人影……。そう、

『伝説』だ。風が強い場所にいる。

『伝説』は天を仰いで言った。

「フツ……。惜しかったな。しかし、潜在能力はわたしを凌ぐ……。か、そう呟いた。

そしていつそう風が強く吹き、『伝説』のマントを揺らしたかと思うと、その姿が忽然と消えた。

第九話 危機（後書き）

いかがだったのでしょうか？

『伝説』ですが、声のイメージは、声優の山寺宏一さんです。それでは。

第十話 自覚（前書き）

今回はエルフィーネの一人称で話が進みます。
独白っぽいです。

第十話 自覚

私はエルフィーネ・リーベルト。皇帝直属の秘密情報機関のトップの娘。だから、小さい頃から情報収集の方法を叩き込まれて来た。私が15になったとき、父様は私を秘密情報機関の一員にした。色々な任務をこなすうち、ロンバルディアとドラクシルの二国間戦争が始まった。皇帝陛下は議長に命じ、中立として、両国に物資を補給した。

そんな中で噂として流れて来たのが、『ドラクシル王国の王族が帝国軍術学校に通っている』というもの。

皇帝陛下も最初は根も葉もない噂だろうと気にしてはおられなかったのだけど、私たちが手に入れたドラクシル王国の書類と、実際のドラクシル王国の発表に違いがあることに気づいた。

そして、皇帝陛下は父様に命じ、出生がはっきりしない軍術学校生を調べた。結果、20人ほどが浮かび上がって来た。さらに絞り込むうち、出生が全く分からない男子が1人。

その男子がスタンリー・アークエッジだった。

私は父様の命で、生徒会長として就任し校則に従うと見せかけて、スタンリー・アークエッジに近づいた。

私を秘密情報機関の人間と一目見ただけで分かったのは驚くべきことだ。彼には強力なバックが付いている。

唐突にそう感じた。調べたり、スタンリー・アークエッジ本人から聞き出したりして、分かったことが1つ、彼の剣の師匠は、『国防衛軍総司令官』カルシウス・シグマー元帥だった。

やはり彼には何かがある、そう感じた私は帝国の機密データベースに侵入し、シグマー元帥の情報をひきだそうとしたが、強力なプロテクトのため、情報を引き出すのが不可能に近かった。

私の部下を何人も送ったが、誰1人として帰っては来なかった。

私とスタンリー・アークエッジが交流していく中で、彼もまた、私に心を開いていき、いつもの大人びた表情ではなく、快活な少年らしい笑みを浮かべたり、とても大切にしている少女　フェルム・ヴェンジェンスのことを話してくれた。純粹に私を信頼してくれている彼を騙していることになぜか心が痛んだが、その感情は知らなかったことにした。

彼は暗部に落ちた私と表の世界を繋ぐ橋だった。彼と話しているときはただのエルフィーネでいよう。そう思っていた。

そして、上級ビースト率いる、ビーストの襲来。この時私は、彼とエリック　彼の親友と一緒に競技場でビーストの大群を食い止めていた。

敵の数が多くて、ショートスピアを握る私の手も感覚が無くなって来ていた。そんな状況下でエリック君　私は彼のことをそう呼んでいる　が、上級ビーストにより、負傷し、スタンリーの言葉に従い私はエリック君を校舎まで連れて行った。

スタンリーが放つ銃弾が風を切る音を背中に聞きながら、私はなぜか不安に襲われた。

きつとこのまま… 2人は素通り… 背中合わせで… 離れていく…。まるで、彼ともう二度と会えないようなそんなイヤな予感があり、私は彼に向かって叫んでいた。

このときの私の声は相当切羽詰まっていただろう。完璧を演じて来た会長の仮面にひびが入った気がした。

エリック君を救護室へ送り届け、急いで競技場に戻る私の耳に、彼が放つ銃弾の音が聞こえて来た。

私は競技場に出て叫ぶ。

その声に興味を持った上級ビーストがこちらに向いて歩いてくる。

ポツカリと開いて、うつろな眼の部分に見据えられ、私は得体の知れない恐怖に襲われて、腰が抜けてしまう。

何処か遠くで、彼がこちらに駆けて来る姿が見えた。迫り来る死から逃げようと目を瞑った。でも、その衝撃はこなかった。

眼を開けると、スタンリーが頭から血を流していた。

それを見た瞬間、私の心の中の何かが壊れた。私は泣いた。

次々に流れ込んでくる感情の嵐。

その中で私は自覚した。

スタンリーが表の世界の架け橋じゃなくて、私にとってスタンリーが光になっていたこと。スタンリーの信念、覚悟、全てが眩しかった。

私の心をどうしようもなく切ないものが刻んだ。

胸の奥が一方的に締め付けられて、たまらなく痛い。その痛みから訳の分からない感情のかたまりが絞り出されて来て、私の内側に満ちてゆく。

それは私が初めて経験する苦しいけど甘く、苦さと心地よさを併せ持った感情だった。

ああ……、私は彼のことが好きなんだ……。

それを自覚すると、私はますます苦しくなり、悲しくなり、ますます泣いた。

「どうして……、私を助けたの……、私はあなたを騙しているんだよ？」

そう、問いかけても、返って来るのは弱い吐息だけだった。

救援が到着し、救急車が到着し、私も共に救急車に乗り込み、帝国病院へと搬送されたスタンリー。

そこで会ったのはデイビット神父だった。彼の名前は帝国で有名だから私も知っていた。彼がスタンリーの保護者であるそうだ。

小柄な少女、ミリと名乗った、少女に責められた。

私の安っぽい謝罪でこの場を終わらせるわけにはいかない、と流れそうになる涙を必死にこらえた。

後ろから、フェルムちゃんが歩いてきた。

私に頭を下げて一言、「スー君についてくれてありがとうとございまして」と。

私は答えるすべを持たなかった。答えられる訳がなかった。スタンリーが大怪我を負ったのは私の責任なのだから。

彼女の眼は赤く腫れており、泣きに泣いたことが伺われた。

こんな時に不謹慎だったが、彼女も、ミリと言う少女も、スタンリーに好意をいただいていることが分かった。

執刀室の長イスの前に座り、永遠とも言える時間が流れた。

実際には2時間ぐらいたったのだろう。

手術は成功だ、と医師が告げに来た。患者は病室に運んでおきました、と医師は言った。

それを聞いて、彼女達は飛ぶような勢いで走っていった。

しかし、わたしは決心がつかなかった。椅子に座ったままでいると、デイビット神父に声をかけられた。

「スタンリーの病室には行かないのかね？」

それに対し私は涙声で答えた。

「私には彼に会う資格がありません」と。

デイビット神父は笑顔で言ってくれた。

「今一番スタンリーが会いたがっているのは君だよ」

その声に顔を上げた私は、デイビット神父に手を引かれ、スタンリーの病室の部屋の前に……。

私は深呼吸を1つすると、スタンリーの部屋のドアをノックした。

「どうぞ、会長」

読まれてる！

私は意を決して部屋に飛び込んだ。そこには、困ったような笑顔を浮かべて、両端の2人の頭を撫でている私が好きな彼。

私は泣きながらその胸に飛び込んだ……と思う。

「お願いだから、お願いだから、私の前で死のうとししないで……」彼の胸で泣き続ける私をスタンリーはギュッと抱きしめてくれた。

5分くらい泣き続け、落ち着いた私は今後のことを聞いて、病室を後にした。

病室の前には父様が待っていた。報告をしろ、と言われたけど、私はこの任務を下りて、秘密情報機関からも抜けることをすでに決めていた。

好きな人を騙し続けるのは不可能だ。当たり前じゃないかしら？父様に抜けることを言うのと殴られた。それくらいは覚悟していたけど……実の娘に拳銃を向けるとは思わなかった。

しかし、そのタイミングを見計らったようにシグマー元帥が角を曲がって来た。シグマー元帥は剣を抜くと拳銃を叩き落とし、父様を拘束した。

「秘密情報機関は私が預かる。エルフィーネ君、自由にしたまえ」「はい！」

そのときの私の笑顔は貼付けた笑みではなく、心からの笑みだったと思う。

夕方、父様は私を追放したそうだ。

私には住む場所が無くなってしまったから、一か八かでデイビット神父に頼んでみると、「部屋は余っているから自由に使いなさい」と言ってくれた。

その言葉に甘え、スタンリーにそのことを報告すると、彼は驚いた表情を浮かべ、表情がすぐ変わり、笑顔になった。

つられて私も笑顔になって、2人揃って涙が出るほど笑った。

私とスタンリーは他愛もない話をしながら面会時間ギリギリまで話し込んだ。私が生まれた中で一番と言っていていいほど楽しい時間だった。

教会に私も住むことをデイビット神父がフェルムちゃんとミリちゃ

んに伝えたらしく、2人は私が住むことになる部屋を掃除してくれ
た。

「これからよろしく!」「と言われて私も笑顔で答えた。
でも、少し疲れたな……。」

おやすみ。

第十話 自覚（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回はスタンリーが退院して、武器屋に行く予定です。
それでは。

登場人物紹介？（前書き）

今回は本編から離れて、登場人物紹介です。

登場人物紹介？

《スタンリー・アークエッジ》

異名『牙狼』

身長 171センチ

年齢 17歳

髪・瞳 短い黒髪に同色の瞳。

使用武器 長剣『ロングソード』 拳銃『ミリタリー&ポリス：マ

ークA』と拳銃『GANNER SINGLE HAND・45』

短い黒髪に狼のように鋭い瞳が特徴の少年。帝国の教会地区で暮らす。帝国軍術学校で実技成績三位、筆記が8位と優秀な成績を収める成績優秀者。本作の主人公。孤児である。養父はドイツト神父。教会地区唯一の賞金稼ぎであり、教会地区の人々の平和を守っている。

孤児という、自らが差別を受ける地位にありながらも他人を気にかけるその優しさで人気がある。しかし、差別を受けて来ているため、狂気が心の中にくすぶっている。それが本人の外面ににじみ出て来て、独特の陰のある雰囲気を持つ。

いつもは冷静沈着に振る舞っているが、実際はかなりの熱血漢。さらに、不屈の闘志までも持ち合わせる。戦闘などになるとそれがよく分かる。自分や身内に対する敵意には非常に敏感だが、上記のような立場にあつたため、自らに向けられる好意には非常に鈍感で、それでありながら乙女心を突くような行動をする困った少年。

異常、と称されるほど闘争センスを持っており、そのセンスに裏打ちされた攻撃の数々は強力無比。しかし、その反面、自らを犠牲にしてでも『大切なもの』を守ろうとする精神があり、そこをつけ込まれると弱い。

興奮状態や凄まじい怒りをあらわにすると眼が赤くなるが、詳しく

は不明。

《フェルム・ヴェンジエンス》

身長 159センチ

年齢 17歳

髪・瞳 肩までの栗色の髪に同色の瞳

スタンリーの幼なじみのような存在。喫茶店『キャンディ』を営んでいる。眼が覚めるような美少女。語尾によく「だよ」と付ける。スタンリーとは家族のような、友人のような、恋人のような曖昧な関係。ある意味ではスタンリーを一番理解していると言える。

清纯で誰に対しても優しい性格で誰からも好かれる。教会地区のアイドルのような存在。

スタンリーにとってはとても大切な存在。スタンリーに好意を抱いている。

《デイビット神父》

身長 170センチ

年齢 58歳ぐらい？

使用武器 七聖剣『ブライトオブキング』

髪・瞳 神父服のフードに隠れて分からないが恐らく白髪、青い瞳。

スタンリーの養父で教会を預かる神父。落ち着いた風貌と言動で、教会地区全ての人から慕われている。反面、スタンリーとフェルムをくっつけようと画策したり、スタンリーをからかう、スタンリーの名前で料理を注文するなど、神父らしからぬことをすることも。スタンリーについて何かを知っているらしい。

若い頃は凄腕の賞金稼ぎだったらしい。

《ミリ・ヘクター》

身長 155センチ
年齢 15歳

髪・瞳 腰まである長い紫色の髪に、同色の瞳。

アイテムシヨップを経営する夫婦の娘。強盗に襲われた時ただ1人生き残った。「ミリは〜」で始まる口調が特徴。

淡く、幻想的で儂げな雰囲気を持つ美少女。しかし、その雰囲気に対して心はかなり強く、親を殺されて絶望するはずなのに、スタンリーに笑顔を見せるほど。

ちなみに料理はプロ級。喫茶店『キャンディ』で働く。なお、スタンリーに好意を抱いている。

《メアリー》

身長 162センチ

年齢 19歳

髪・瞳 砂金のようなキラキラした長い金髪と青い瞳。

喫茶店『キャンディ』のウェイトレスにして、看板娘。彼女に会った人々の第一印象は、『お姫様』

しかし、その実態は、イタズラ好きの少女。近所の頼れるおねーさんのような雰囲気を持つ。ボディはそこらのモデルより遥かに豊満で、スタンリーによくイタズラを仕掛ける。スタンリーに対しては弟のような感情を持っている。

《エリック・フロント》

身長 175センチ

年齢 17歳

髪・瞳 灰色のやや長めの髪に同色の瞳

使用武器 長剣『ロングソード』拳銃『トコル・ガバメント』

スタンリーの通う帝国軍術学校の実技成績次席にして、スタンリーの親友。かなりのイケメンだが、口を開くと女好きのお調子者。しかし、剣の腕は確かで、『剣術の天才』と呼ばれる。しかし、それに反比例して、筆記は底辺。両親は旅の行商人で、寮で暮らしている。いつも、スタンリーから凄まじいツッコミと言う名の暴行を受けるがそれでもめげない健気な男。あつちの気があるのではないかと噂されている。

スタンリーからはとても信頼されており、2対2の実戦訓練のときは背中を任せられる男。いつもはひょうひょうと振る舞ってはいるがやるときはやる男。

《クリステイーナ・アルフドルフ》

異名『ブリュンヒルデ戦女神』

身長 164センチ

年齢 17歳

髪・瞳 蒼く長い髪に同色の瞳

使用武器 大剣『グレートソード』

アルフドルフ家の長女であり、軍術学校四位の成績を持つお嬢様。口調もお嬢様口調で、お高く止まっていると見られがちだが、実際は差別をせずに平等に接することが出来る性格。その美貌と立ち振る舞いから、絶大な人気を誇る美少女。

スタンリーにあつたときからその少し陰のある雰囲気に着かれており、彼に助けられてそれが好意に変わった。

《シャールロット・サーバス》

身長 150センチ

年齢 16歳

髪・瞳 鮮やかな桃色のツインテールと同色の瞳

使用武器 双剣『ダブルソード』

スタンリーが組んでいたチームの後輩。とてもかわいらしい容姿で、自分のことを『シャロ』と呼び、語尾が「〜ですよ」になるのが特徴。

実技は全体の10番以内にはいるなど、とても優秀な成績だが、筆記はエリックより絶望的。昔落ちこぼれだった自分を気にかけてくれたスタンリーのことが好き。

《エルフィーネ・リーベルト》

身長 162センチ

年齢 17歳

髪・瞳 澄み切った空のような水色の髪セミロングとエメラルドのような瞳

使用武器 短槍『ショートスピア』

軍術学校最強の少女にして、生徒会長。絶世の美貌と圧倒的なカリスマで、マインド・コントロールの領域まで生徒の人心を掌握している。しかし、その実態は秘密情報機関のトップの娘。完璧を装って来たが、心の中では、普通の生活を望んでいる。父親の命令でスタンリーを監視するが、それが次第に好意に変わっていた。結果、家を追放され、現在は教会にスタンリー達と一緒に同居している。

《カルシウス・シグマー》

身長185センチ

年齢 48歳ぐらい？

髪・瞳 騎士のヘルムに隠れて不明、眼は茶色

使用武器 神剣『アンドレイエツジ』

帝国で勝てるものはいない最強の騎士にして、国防衛軍総司令官。スタンリーの剣の師匠でもある。その強さは屈指のもので、スタン

リー達が苦戦した上級ビーストを一太刀で切り伏せるほどの腕を持つ。スタンリーのことを何か知っており、彼のピンチには必ず駆けつけると決めているらしい。

《伝説》

身長 185センチ

年齢 不明

髪・瞳 ゴーグルとスカーフに隠れているため不明

使用武器 不明

ビーストハントなどで稼いだ賞金額は大陸最高を誇る。常に威圧感があり、戦闘に関しても卓越している。人間とは思えない身体能力がある。スタンリーを見守っているが真意は不明。全てが謎に包まれている。デビット神父とは旧知の間柄であり、スタンリーの力について知っている模様。

登場人物紹介？（後書き）

次回は本編に戻ります。

第十一話 武器職人（前書き）

ついに皆さんお待ちかねのドワーフが登場！

え……？待ちかねてない？

それは失礼しましたあ！！

第十一話 武器職人

二日後、『驚異的』な回復力を見せたスタンリーは、無事退院することが出来た。

もちろん、退院パーティーがあつたのだが、ここでは割愛する。

朝、いつものように喫茶店『キャンディ』で朝食をとったスタンリーは、エルフィーネと共に、教会地区の南にある、『武器屋』を訪れていた。

彼の使っているロングソードの経験値が一定数値まで達したので、強化を頼みに来たのだ。

『ロングソード』……帝国内で使われている、扱いやすい一般的な長剣。

これに、『アイアンキューブ』……何の変哲もない鉄のかたまり

ビーストなどが落とす を加え、鍛え直してもらうのだ。

「会長、紹介します。ここが俺の鼻肩にしてる武器屋です」

スタンリーは頭に包帯を巻いた格好だが、笑顔で言った。

「へえ……結構いいところじゃない」

と誰もが見惚れる笑みで答えるエルフィーネ。

「こんちはーっす。親方あー！いますかー！」

ドアを開け、大声で叫ぶスタンリー。

それに答えて、筋骨隆々のドワーフが出て来た。

「おお、スタンリーの坊主か。今日はどうした」

ひげを手で引っ張りながら言う親方。

「ジンガさん、今日は俺の武器と、彼女の武器を鍛えてもらいたいですけど」

そう言つて、スタンリーはエルフィーネの方に向き直る。

「おお、これはまた別嬪な嬢ちゃんだ。わしはジンガ。ここの親方で武器職人じゃよ」

ジンガはそう、精悍な笑顔を見せ、自己紹介をする。

「エルフィーネです。ジンガさんのことはスタンリーから伺っております」

「おお、そうか！で、坊主は何と言っておった」

「それを言っているとスタンリーが恥ずかしすぎて死ぬと思います！」

「うわっはっはっは！」

いいコミュニケーションが採れたと感じたスタンリーは早速、と言わんばかりに切り出した。腰からロングソードを抜き、エルフィーネも背中中のショートスピアを抜いて、台座に置いた。

「ほう、これはよく使い込まれておるな……」

「どうでしょう？」

「スタンリーの坊主の方はアイアンキューブだけでよいじゃろうが

……嬢ちゃんの方はトップレベルの硬度を持つ金属が必要じゃな」

「メタルキューブとかですか？」

「そうじゃな」

スタンリーはもって来た麻袋の中をのぞき、何個かの銀色の光を反射するかたまりを取り出した。

「これぐらいしかありませんが……足りませんか？」

台座に置かれたそれを見つめ、スタンリーの質問の答えるジンガ老。「何とかなるじゃろう、よろしい。明日とりに来なさい。料金はいつもの通り前払いじゃ。それに見合う仕事はしてみせるので」

腕を組みつつ答えたジンガ老。

「分かりました」

そう言つてスタンリーが財布から取り出したのは500ゴールド。

一番最初の強化にかかるのがこの値段だ。同じく、エルフィーネも財布から500ゴールドを出す。ちなみに日本円でいうと10円が1ゴールドという計算になるので、5000円という計算になる。

エルフィーネは壁にかけられたダガーを見つめていた。30本組800ゴールド。投げナイフとして使える遠距離武器　と表示されていた。

「遠距離武器が私にもいるかな……。これ買おう」

そう呟くと、ダガーの入れられている箱を手に取り、ジンガの所までもっていった。

「これ、買います」

そう言うのと、ジンガの前へ800ゴールドを置いた。

「毎度あり、えーっと、スタンリーの坊主がロングソードの強化。

強化後は『ロングソード？』エルフィーネの嬢ちゃんがショートスピアの強化。強化後は『ショートスピア？』じゃな

「分かったつす。じゃ、親方あとはよろしく」

「任せとけ！」

そう答えると、スタンリーはエルフィーネの手を握り 彼女が頬を赤くしたことは気づかなかった 外へと出て行った。

「どうする、エルフィーネ？」

スタンリーの黒曜石のように黒い瞳がエルフィーネの顔を覗き込む。それに顔をさらに赤くしながらエルフィーネは答えた。

「散歩でもしましょう」と。

それにスタンリーは賛成し、2人は自然に、ごく自然に手をつないで歩き始めた。美男美女であるため、誰もが振り返るが、それは逆に初々しい雰囲気を出している2人に周囲の大人達は顔に穏やかな笑みを描いた。

ちなみにこの時、投げナイフがはいった箱は、エルフィーネの太ももに取り付けられている。

2人は目的もなく、つれづれに歩いていると公園に出た。教会地区ではなくその奥の居住区の中程まで歩いて来たことになる。

「ちよつと疲れた？」

「そうだね……」

そう2人は頷き合って、公園のベンチの腰掛けた。2人は、近くのお店で買ったお弁当を開け、食べ始める。

フェルムが作ったものよりは遙かに味気なかったが、食べ終えて、何となく2人揃って空を見上げていると、エルフィーネの袖がくいくいと引かれた。彼女がそちらを見ると、6歳ぐらいの少女達とキラキラした瞳で聞いてきた。

「お姉ちゃん、一緒に遊んでくれますか？」
実は子供好きのエルフィーネ、この誘いを断れる訳がない。スタンリーに「ごめんね」と言うと、子供達に引っ張られ、遊具場へと連れて行かれてしまった。

それを苦笑まじりに見送ると、腕まくりしたワイシャツの上に引っ掛けていた、狼が描かれたジャケットを毛布代わりに自らの顔に被せると、ベンチに寝転がった。

どれくらいたったのだろうか……。

彼は柔らかい感触と、甘く涼やかな香りを感じて眼を覚ました。

「あら、起きた？」

寝ぼけ眼のスタンリーの顔を覗き込むエルフィーネ。

「なっ！なああ?!?!？」

次の瞬間、自分がエルフィーネに膝枕されていることに気づいたスタンリーは飛び起きる。

ストッキング越しの膝枕がここまで気持ちいいとは……癖になりそうだ、ってイカン！思考がおかしくなってる！

いくら鈍感な少年といえども、思春期で人並みに異性に興味がある。この体勢は自分の理性にとって非常にまずい、そう感じたスタンリーは飛び起きた状態で左手一本でバク転のような格好をしてベンチから飛び降りると眼にも留まらぬ速さで土下座をした。

「何かごめん！迷惑かけた！」

それを周りの大人が微笑ましい眼で見る。エルフィーネと遊んでいた子供達は訳が分からず首を傾げていた。

「気にしないのっ。私が好きでやったんだから」

「そ、そーっすか」

スタンリーは土下座の体勢から立ち直り、またベンチに腰掛ける。いつの間にか太陽は西に傾き、山の陰へとその身を隠そうとしていた。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんはふーふなの？」

子供達からいきなり突拍子もない爆弾発言が飛び出した。

「ふっ！夫婦！??」

「……は？」

エルフィーネは吹き出し、スタンリーはその鋭い眼を点にした。彼の珍しい表情だ。二度と見れないかもしれない。オークションで高い値段がつきそうなので写真を撮った方は出品するとよいですよ。

「おねーちゃん！この兄ちゃんは悪い人なんだぞっ！この前キレーなお姉ちゃんと手をつないで歩いてたんだ！そういうのってウワキっていうんだろ！」

小さい男の子が唐突に叫んだ。

その言葉を聞いて、スタンリーの表情が一瞬固まる。その次の瞬間、スタンリーは笑顔になった。見る人が見れば怒っていると分かる表情だ。

「オイ……ガキ……」

そう言っしてしゃがんで視線をあわせるスタンリーはぱつと見いいお兄さんに見えることだろう。

「どの面下げてそんなセリフ言っつてんだ、コラ……！」

その眼が爛々と光ってなければ、だが。

「な、なんだよ、悪者野郎」

ピシッ。スタンリーの貼付けたような笑顔が凍り付いた。スタンリーは男の子の頭を掴むと言った。

「ガキ……。口の聞き方が分からねえか？俺がマンツーマンで教えてやるつか、ああ？」

っていうか、7歳児ぐらいの男の子に凄む17歳ってどうなのよ。

「すいませ〜ん！うちの息子が迷惑かけました〜！」

と言ってこちらに走って来たのは若い女だった。

「こら！何やってるの！」

とスタンリーに頭を掴まれている男の子を怒ると、その手を引っ張って連れて行く。

それをスタンリーは見送っていたが、しばらくすると視線を外した。

「テムエの息子の謝罪ぐらいしていけよクソ野郎」

そうスタンリーは毒づいた。

あの若い女は、孤児であるスタンリーを酷く嫌っていたのだ。直接口に出さないが、その眼が如実に語っていた。

それを敵意に敏感なスタンリーは感じ取ったのだ。

「チツ……」

スタンリーは舌打ちを1つし、エルフィーネを振り向くと、「行きましょう？」と一転、優しい笑みを浮かべた。

「スタンリー……！」

彼女はその手を取らず、スタンリーの後ろを指差した。

そこには、『キャンディ』の常連であるどっぷりと太ったおばさんがいた。彼女にしては珍しく、焦ったようにこちらに向かって来ている。

「大変！スタンリー君、これを！」

スタンリー達の前まで走ってくると、おばさんは懐から、1枚の書類を取り出した。

そこに書かれていたのは、教会の孤児院の子供の1人が、コペン平原の寂れた小屋をねぐらとする盗賊弾に攫われたというもの。

書類の一番下には『緊急ミッション』と言う文字が。アンダーラインもはいつている。そして、『ギヤラクシア公社』の文字。

たびたび出て来ているが、ギヤラクシア公社というのは、賞金稼ぎの管理、新米賞金稼ぎのための『大陸自由通行証』の発行、『ハンターライセンス』の発行、ハンター達の装備の開発、『賞金首』ピーストの制定、ランキングの制定、ピーストのランクの制定などを一手に引き受ける会社だ。

100年ほど前にロンバルディア大陸同盟、ドラクシル王国、エンパイア帝国の三国合同で始められた。現在は民間に払い下げられ、三国の手を離れている。

「一日待たないと。武器がまだだ」
スタンリーは苦い表情で言って、唇を噛んだ。

どうしてこんな時に限って！

自分のふがいなさに怒り狂いたくなる。が、スタンリーはその衝動をなんとか押え込み、教会に帰ると、銃を分解して整備を始めた。その音は闇が空を覆い、何処かでフクロウが鳴き始めても止まなかった。

第十一話 武器職人（後書き）

いかがだったでしょうか？

今年ももうすぐ終わってしまいますね……。今年高校生になって、大震災など色々ありましたが、東北の皆さんには頑張ってもらいたいとおもいます。

それでは、よいお年を。

第十二話 奪還（前書き）

遅ればせながら、あけましておめでとございます！
今年もよろしくお願いします！

さて、今回は盗賊団のアジトに突撃、さあまた何かイベントは起
るのか！？

第十二話 奪還

朝。

スタンリーとエルフィーネは警察の機動隊が乗るヘリにいた。向かう先はコペン平原。そこに盗賊団のアジトがある。機動隊と共にスタンリー達も突入する腹づもりだ。盗賊団の目的は不明、何のために外で遊んでいた孤児を誘拐したのか分からない。

盗賊団からの通知によると、『我々のお宝を盗もうとしたから』だそうなのだが、そのお宝がなんなのか分からないため、推測のつけようがないのだ。

「まったく、頭のイカれた連中の仕業か？」

とある意味呆れたような顔をして言うスタンリー。

「それはないんじゃないかな？」

エルフィーネは呆れ返って足を組むスタンリーに苦笑する。

ここ一日二日で随分と仲が良くなった二人であった。

「そろそろ奴らのアジトに着く。準備してくれ」

精悍な顔をした機動隊員が二人に声をかける。二人は揃って「了解」と答えるとスタンリーは銃の最後の点検をし、エルフィーネも、懐のサブウェポン 昨日買ったダガーの切れ味を確かめる。

「見えた……！屋上に見張りはいない！」

その言葉と共に見えてきたのは、建設中であつたが、ビースト増加のため工事を断念し、廃墟になつたビルだつた。

「了解、A班B班は高速ロープ降下で屋上に降下！ビルを制圧せよ！C班は人質を搜索、保護せよ！」

機動隊の隊長はそう言った後、スタンリー達の方へ向き、忠告した。「先日とは違い、スタンリー君は賞金稼ぎとしてここにいる。援護は出来ない。気をつけてくれ」

「分かっています」

スタンリーは静かに答えた。戦闘を前にして興奮している訳でも

なく、かといって怯えている訳でもない。そこには賞金稼ぎとしてのスタンリーの顔があった。

さすがに低級とはいえ、二年間ビーストを狩り続けているのだからさすがである。

「会長、俺が先に降下します」

エルフィーネに一声掛け、ロープを使ってしゅるり、と降りる。

片膝を立てて着地したあと、腰から『ミリタリー&ポリス：マークA』を抜き、辺りを警戒した。

続いて、エルフィーネが降下したが、着地の寸前でバランスを崩し、空中に投げ出された。

「きゃっ！」

と悲鳴を上げて、倒れ込んだ所には運悪く(?)スタンリーがいた。スタンリーも、

「うわあ!？」

と驚きの声を上げてくはずほぐれつ転がった結果、端から見るとスタンリーがエルフィーネを押し倒しているような状態に。さらに、その右手は胸をがちりとホールドしていた。

しばらくしてそのことに気づいたスタンリーは慌てて飛び退り、「ごめんっ！」と土下座をした。

エルフィーネは顔を真っ赤にして小声でぼそぼそと呟いた。

「別によかったのに……」

その声はスタンリーには聞こえなかったのだろう、「何か言った?」
と聞き返した。

「な、何でもないっ！」

と喋ってぶいっと別の方向を振り向いた。

その耳が赤く染まっているのは気のせいではないのだろう。それにさえスタンリーは気づかなかった。スタンリーの頭には疑問符がたくさん浮かんでいる。その凄まじい鈍感さに内心溜め息をつきつつ、エルフィーネはスタンリーの背中を追った。

その二人の後ろ姿を太陽と、こんな所でラブコメするな、と呆れ

た機動隊員たちが見送っていた。

屋上のドアを開け、階下へ下りていく二人。ここはもともと、ホテルとして立てられたそうだ。それゆえに、部屋が非常に多い。それを一つ一つ探していかなければならない。

スタンリーは憂鬱な気持ちになった。

「チツ。めんどくせえ」

そう吐き捨てながらも、部屋を一つ一つ確認していくスタンリー。文句をいいながらもきちんとやるその姿勢は彼のぶっきらぼうだげど見捨てられない性格を物語っていた。

そんなスタンリーに苦笑しながら、ついていくエルフィーネ。もとの相性の良さも相まって、この二人は死角を完全にカバーできるようになっていた。

しばらく歩き、階段にさしかかった頃、窓をぶち破りビーストが侵入してきた。

まるで大きな蜂のようなその姿。そして翼はまるで植物の葉^{リーフ}だった。飛空昆虫型ビースト『リーフライ』。主に帝国全域に分布しているビーストだ。最も低級なビーストであり、簡単に倒せるが、気をつけるべきはその毒針。刺されると、強いしびれが全身を襲う。

スタンリーは自らの左に銃を向けた。視線はそちらに向けずに、前を見据えたまま。

「邪魔だ」

と一言。

まるで機関銃のような早撃ちがリーフライ達を襲い文字通り蜂の巣にした。何と皮肉なことだろうか、蜂に似ている姿だけに。

スタンリーはシャコンツ、と軽い音を響かせ、弾倉をすぐさま交換した。

「相変わらずの凄腕ね」

「ふん……会長にそんなセリフ言われたら終わりの気がするんですけど？」

「あら、おねーさんか弱い女の子なのに」

「俺とあんたは同じ年だろうがっ！っ！か、か弱い女の子は盗賊団のアジトに突っ込んだりしねえよっ！普通は祈りでも捧げて待つてらるだろうがっ！」

スタンリーの三段ツッコミが炸裂した。

「そお？フェルムちゃんみたいなの？」

「そうそうフェルムみたいなの……っ！なんでアイツの名前が出て来るんだよっ！」

ノリツッコミ炸裂。

とうかこの二人今自分達のいる所が盗賊団のアジトと言うことを忘れてないか？それを知っていてこの間抜けな漫才をやっているのだったらすごいことだが。

ほら、盗賊の部下達が気づいて階段を上ってきた。

「まずいっ！隠れよう！」

そう言つて二人が急いで隠れた場所は掃除用具が入れてあるはずの背の高いロッカー。しかし、十七歳の男と女が中に入るにはやはり、とうか、(当たり前前のことだが)小さかった。当然、二人は密着することになる訳で。

(まずいまずいまずい！これはまずい！何か女子特有と言うか何と言うか、何か甘い香りがする……！しかも涼やかな香りもする……！それよりなにより、胸が、胸が当たつてる！頑張れ俺の理性防衛軍！)

スタンリーが頭の中で理性と本能の大戦争を繰り広げている間、エルフィーネはこの密着した状態に対し真っ赤になっていた。それもそうだ。気になる……とうか、好きな男と密着しているのが嫌いな訳がない。

(あつたかあい……)

そう思つて彼女はスタンリーの背中に腕を回して、その肩に顔を埋

めた。

むにゅにゅう。彼女の豊満な胸がスタンリーの胸板に当たって形を歪める。その感触に理性がさらに追いつめられる気がしたがそれは放つといておく。

（うおお！？何でさらに密着して来るんですかね会長！？しかもさらに胸が当たって……！あ、会長の髪なんかいい匂いするなあ。同じシャンプー使ってるはずなんだけど……！？）

決してスタンリーは変態ではありません。ただ、ヘタレだけです。これはデイビット神父が断言したことです。彼の場合、ヘタレすぎで女性にとつて人畜無害な領域にまで達しています。ただ、人並みに興奮はあります。

ただいま、スタンリーの理性防衛軍の陣地が一つ陥落しました。ぎゅっ……。

エルフィーネは狼狽するスタンリーの体にさらに強く抱きつく。

（だからなんでくっついてくるんだ会長！？というかこんな事が前にも二度ほどあった気がするが！？）

あゝ、ミリとシャーロットの時ね。いや、むしろその時はお前から抱きしめただろうが。なんで自分から抱きしめた時は恥ずかしくなくて相手に抱きつかれたら恥ずかしいんだ、お前は！羨ま……じゃなかった！けしからん！

その頃、機動隊は盗賊団を急襲。盗賊団の七割を捕縛していたが、肝心の幹部級の連中とボス及び人質が見つかっていなかった。機動隊の隊長は焦り始める。

「くっ！探せっ！風潰しに探せっ！」

そう言つて隊員達をホテル全体に散らせる。

「まずいぞ……、捕縛できなければ本当に帝国警察の名折れだ……！」

一方、ラブコメ展開中の二人はというと……。エルフィーネが少しの異変を感じていた。

(うん……？なんか何処かが固くなってるような……？) 絶世、と言う言葉が当てはまる美少女に密着されて(して)起こる生理現象がスタンリーの体に起きていた。

(ま・ず・い………………。俺、終わったああああああ！！)

と心の中で絶叫していた。冷や汗が体中から噴き出していた。

その時、彼女が顔を上げた。自分の息子がどうなっているか確認しようとして下を見ていたスタンリーと視線が絡み合った。

赤い顔、潤んだ眼、それが自分を見ていることに気づいたのは少し時間が経ってからだった。

それほど、スタンリーは彼女に見惚れていた。

(……………っは！ヤバイ、見惚れてしまった)

「まったく、大胆だなあスタンリーは。おねーさん驚いちゃったじゃない」

何か小声で言っていたので、スタンリーの意識がそちらに行く。

「ん……………」

(え。ええええっ！！え、エルフィーネさん？ 何で眼を閉じて、唇をやや上向きに突き出すんですかね、突き出すんですかね！?)

「……………」

静かに待っているときの彼女の顔は、何度も思ってきたけど、やっぱりきれいだった。

(これはヤバイ……………引き込まれる……………)

スタンリーが肩に触れると、彼女はぴくんと一度震える。

それから改めて身を預けてくる彼女にスタンリーはゆっくりと顔を近づけて。。。

ガシャンッ！！

何かが崩れる音。

それに気づいた二人は、はっと我に帰り、お互いの体を限界まで放した。

先ほどまでに甘く妖しい空気に二人とも酒を飲んだように酔いしれていた。それに気づいた二人は一度視線を合わせるとまた、さつ、と眼を逸らす。

お前らどこの初々しいカップルだ、とツツコミが入ってきそうなことをしている。

「と、とりあえず、今の音を確かめに行こう」

「そ、そうね……」

エルフィーネは少し残念そうな顔をしていたが。

スタンリーはさっきまで優しい色を宿していたその瞳が細められ、すぐに警戒態勢に入る。エルフィーネもそれに合わせたようにスタンリーの背中をカバーする。

二人は厳しい表情のまま、何かが倒れるような音がした場所にたどり着いた。

「壁……だね。どうしようか……？」

と顎に手を当てて考え込むエルフィーネにスタンリーは気楽な表情になって言った。

「ああ、それなら俺に任せてください」

「どうするのさ？」

「まあ、見ててください」

スタンリーはそう言うと、『ミリタリー&ポリス：マークA』をしまい、ジャケットの右側から、もう一つの銃、『GANNER SINGL HAND・45』を取り出す。

ジャコンツ、とバレルを後ろにスライドさせ、薬室を開ける。スタンリーが横にあるボタンを操作すると、排莖口に急速に空気が吸入されていく。その異様な光景を見てエルフィーネは声を上げた。

「何をする気なの!？」

「見てれば分かりますって」

その端正な顔に笑みを浮かべながらスタンリーは答える。

しばらく空気が吸入されたあと、スタンリーは拳銃のボタンを操作し、薬室を閉める。壁に標準を向け、トリガーを引き絞る。それと同時にキュイイイインツ……!という異様な動作音が聞こえ、その銃口に青い光が集まってゆく。

その光を見て、エルフィーネは顔色を変えた。

「まさか、空気を圧縮しているの!？」

そう、スタンリーがしたことは、銃に空気を取り込み、それを圧縮している。それによって出来るものは。

「^{プラズマ}高位電離体……」

プラズマを造り出しているのだ。

この世界にはすでにプラズマガンというものが登場している。その場合、マガジン式で弾丸を装填するが、弾丸の中に高密度のプラズマが圧縮されており、銃から射出された時点で、弾丸はプラズマの熱で空中分解し、プラズマだけが目標に飛んでいく仕組みなのだ。エルフィーネからすれば、銃の中で自らプラズマを造り出すなど、今のこの大陸の技術水準では不可能のはずだった。

スタンリーは一体何者なの……!？

得体の知れない技術への恐怖。そしてそれを平然と扱う想い人への恐怖。エルフィーネは自らの心に生まれたそれらを振り払い、スタンリーの背中を見つめた。

青い光が最高潮に達した時、スタンリーは一度トリガーを放した。そして、エルフィーネの方に顔を向ける。

「驚きましたか？」

そうイタズラな笑顔で問いかけてくるスタンリーに対し、無言で首を振るエルフィーネ。いつもとは完全に立場が逆転していた。いつもなら、スタンリーがエルフィーネにからかわれることが多いのだが。

「消し飛ばせ！」

その言葉と共に放たれた青い閃光は壁をバラバラに砕き、そこにいた盗賊団の幹部もろとも吹っ飛ばして消滅させた。

『蒼い箱舟』

そう呼ばれるスタンリーの固有技。スタンリーの異常な闘争センスとスタンリーしか扱えない特殊な銃、そして、スタンリー本人の技術。それらが合わさって強力な威力を持つこの固有技は、スタンリーの必殺技の一つとして帝国軍術学校で有名になっている。

その凄まじい威力はかつて強固な装甲ともいえる甲羅を持つビーストに重傷を負わせたことでもうかがえる。去年、コペン平原で実戦訓練中に突如現れた新種のビースト。その強さは教官達を難なく蹴散らしたほど。チームメイトの一人を庇って重傷を負ったスタンリーは、たまたまチャージが完了していた『蒼い箱舟』をぶっ放した。放たれた高位電離体はビーストの腹の部分の甲羅を砕き、ダメージを与えた。苦しそうに唸ったビーストはその後何処かへと消えていった。

後日調べたところ、その新種のビーストは帝国とロンバルディア大陸同盟の国境に広がる『コーカスの密林』に最近現れた新種のビーストで危険度はギャラクシア公社によると特一級、帝国によるとS級クラスのビースト。つまり『賞金首』だ。実態も生態も詳しくは不明で、分かっているのは全身に炎を纏っているということ、尋常じゃないほどのタフネスさを持ち、スタンリーの『蒼い箱舟』つまりは超高密度圧縮プラズマ熱線を受けても、逃走できるレベル。そして、ビーストとしての形態はタートルやトータス 装甲亀型ビーストということだ。

これは推測だが、墜落した飛空船のエネルギーを食物にしているのではないかと言う見方もある。ギャラクシア公社ではこのビーストに一万六千という膨大なハンターポイントを付けている。これまでに挑んだ賞金稼ぎたちがことごとく丸焦げにさせられることから、『火の王』と異名が付いた。

話を戻そう。

仲間が消し飛ばされたことに気づいた残りの幹部達がスタンリー達がいた方に銃や剣を向けるが、スタンリーは土煙の中で次の攻撃の準備を終えていた。

スタンリーは拳銃二丁を横に寝かせ、腕を地面と水平にクロスして構える。

その異様な構えを見た盗賊達やエルフィーネは眼を丸くする。

「これでも食らいな！」

その言葉が盗賊達にとっては冥土の土産になったことだろう。

まるで多銃身砲塔バルカンのような切れ目のない連射。弾丸の発射音が繋がって聞こえる。空薬莢がまるで滝のように流れ落ちる。右手の『ミリタリー&ポリス：マークA』の弾丸が切れると、刹那、右腕に装着された自動給弾システムが起動し、マガジンの交換を眼に見えない速度で行う。左手は無論、『GANNER SINGL HAND・45』である。こちらの場合は、自動で弾丸を生成するためマガジンの交換など必要ない。しかし、銃身が真っ赤に熱されているが。もちろん、弾丸の生成速度は、スタンリーがトリガーを引くのに合わせて行われるため、弾丸の生成が間に合わないという心配はない。

早撃ちの領域ではなく、神業ともいえるそれに、エルフィーネはぼかんと口を開けてしまった。

『ラッキースファイア』
『幸福なき炎』とよばれるそれは、スタンリーの代名詞レベルまで有名な技だった。技の名前には自分の孤児という被差別の対象になる境遇に対する自嘲と、この帝国そのものに対する痛烈な皮肉が込められている。

自らの最高速度の射撃で正面の敵に集中攻撃ができる。この攻撃は非常に強力だ。遮蔽物に隠れていても弾丸の大瀑布に押し流されるのは眼に見えており、それに気づいた何人かも、体中を穴だらけにされて死んだ。

残ったのはボスと幹部二人、そして人質である孤児院の子供。そ

して、その子供が大事に抱えているのはモーゴレムの革で出来た細長い袋だった。

「ク、ククク……素晴らしい……！」

盗賊団のボスらしき男が拍手をしながら言う。スタンリーはその笑いに嫌悪感がこみ上げ、眉をひそめた。

「……何がおかしい」

凄まじく低い声。彼が怒っているのは明白だった。

「君の実力さ」

そう言ったボスらしき男が続ける。

「僕の盗賊団に入らないかい？」

「ハッ、勧誘はお断りだ」

「むう……つれないねえ」

「当たり前だ、クソツタレ野郎が」

ピクツ、と盗賊団のボスの頬が震える。

「なめるなよ若造があ！」

「で？おしゃべりは終わりか？」

スタンリーは呆れたように肩をすくめた。

「行けっ！」

残りの部下二人に命令し、けしかけるボス。

そのうちの剣を持った方を腰の剣を抜く手も見せずに抜き打ちで斬り倒す（急所は外している）スタンリーは、後ろにいたエルフイーネを振り向き、もう一人はよろしく、と目配せしたあと、強化されて切れ味がさらに向上した『ロングソード？』を片手に跳躍して斬り掛かった。

「イエエエアアア！」

と特徴的な気合いを発しながらスタンリーは重力落下もあわせた袈裟斬りを打ち込んだ。それを盗賊団のボスは美しい足捌きでかわすと、腰の剣を抜き、スタンリーを突いた。自らの首を狙って来た剣の腹を手刀で弾き、こと無きをえたが、その剣を見て声を失った。

「サーベル………あんだ、まさか帝国軍か！？」

帝国防衛軍が装備しているのはサーベルと呼ばれるグリップガードが付いた片刃の剣。ロンバルディア軍の兵士はショートソード、ドラクシル王国軍の兵士はスタンリーが使っているような長剣。ドラクシル聖騎士団はグレートソード。それぞれ三国共に使っている獲物が違う。だから判別がしやすい。では、賞金稼ぎ達はどうかという、大陸をさすらう賞金稼ぎはほとんどサーベルを使わない。対ビーストには向かないからだ。

「……クソ野郎が、それでも国を守る軍人か！」

「そんな事僕にはどうだっていい。僕が興味あるのはもっと上のポストだ」

「そうかよ。あんたがどうしようもない野郎だと言うのは理解できた」

「若造が！後悔するなよ！」

と言って先ほどより激しい突きを打ち込んで来たが、スタンリーはそれを体を半回転させて避けると、つんのめった背中へ半回転の勢いを乗せて蹴った。

「ぐおっ」

ちょうど肝臓の後ろ辺りに当たったのか、変な叫び声を上げて転がった。だが、後転をして体勢を立て直すと上段から雷光のように落ちかかってきたスタンリーの斬撃を受け止める。

盗賊団のボス改め帝国軍人はそれを弾き返すと、スタンリーの脇腹に突きを送った。

「ぐっ！？」

体勢が整っていないスタンリーはそれを見事に食らい、後ろに吹っ飛ばされた。

グシャン、と自分が作った瓦礫に体をぶつけるスタンリー。それを見ていたエルフィーネは叫んだ。

「スタンリーッ！！！」

スタンリーはそこから何事もなかったかのように起き上がると、瓦礫の粉を払った。

それを見て帝国軍人は顔色を変える。その顔は怒り一色だ。

「なぜ死なない！？僕の突きは完全にとらえたはずだ！」
それに対しスタンリーは平然と答える。

「ああ、このジャケットは特殊は繊維が編み込まれてんだ。対ビースト用にな。人間の攻撃なんてさらさら通用しねえぜ」

そう言つてスタンリーは五メートルほど離れた距離を一気に走り片手斬りを叩き付けた。振り下ろされた時にはもう一方の手がすでに追いついている。それを帝国軍人は危うくかわしたが、次の瞬間自らの額を狙ってきた突きを避けねばならなかった。しかし、回転斬りを避けきれなかったがために、左腕を斬り飛ばされた。

「ぎゃあああああつ！」

獣じみた悲鳴が帝国軍人の口からほとばしると、機動隊員がこの部屋に乗り込んでくるのが全く同時だった。

「……むっ……」

機動隊の隊長は一声唸ったきり言葉を発しなかった。

スタンリーと話している機動隊員は報酬の話をしていた。

「報酬についてなんだけど……」

と切り出した機動隊員だったが、スタンリーに遮られた。

「うちのガキが抱えてるヤツでいい」

「む……そうか」

「多分形から見て、剣だしな」

「そうかい」

その言葉を最後に、ヘリには沈黙の帳とほりが降りた。

一路ヘリは教会地区のヘリポートを目指している。

教会のヘリポートでスタンリー達を降ろすとヘリは警察署へと飛び立っていった。

教会の入口にはデイビット神父やフェルム、ミリに孤児院の子供達、といった教会で暮らすみんなが集まっていた。デイビット神父は誘拐された子供を怒ったりもしたが、教会は喜びに溢れていた。

今日の夕食はフェルムとミリが腕を振るい、教会で暮らすみんなで夕食にした。

そんな食事の時にデイビット神父はスタンリーに声をかけた。

「今日の報酬はなんだったんだ？」

スタンリーはカボチャの冷製スープを飲みながら答えた。

「剣、さ。緊急ミッションだったから、ギャラクシア公社からの報酬も十五パーセントばかりアップしてるけどね」

「剣？どういうことだ？」

さすがのデイビット神父も不思議そうな顔をして聞き返した。

「盗賊団のお宝さ。何か曰く付きみたいだったから無理言ってもらってきた。ちよつと後で見えてみて」

「まったく、お前は」

デイビット神父は苦笑するが、スタンリーはにやり、とした笑みを向けてみせた。

フェルムがスタンリーの隣、というのは定位置なので、それを知ったエルフィーネにここぞとばかりからかわれてフェルムは顔を真っ赤にするがスタンリーは上手く受けながす。

昨日の夜や今朝のような緊張感たつぷりな教会はやっぱり変だ、と思いながらスタンリーは食事に舌鼓を打った。

。そんな教会で暮らす大きな『家族』を月が優しく見守っていた。

第十二話 奪還（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は、手に入れた剣に関する話になると思います。

後三日で学校の冬休みが終わります。それで、12月のときのように頻繁に更新は出来なくなりそうですが、これからも応援よろしくお願いします！
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338z/>

ロード オブ ギャラクシア 少年と恋する少女達

2012年1月6日17時38分発行